

Title	カミーユ・デムーラン(Camille Desmoulins)とブーショット大佐(Colonel Bouchotte)
Sub Title	Camille Desmoulins and Colonel Bouchotte
Author	鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.35(293)- 105(363)
JaLC DOI	
Abstract	"Vieux Cordelier", the paper published by Camille Desmoulins, tell's us not only about political assertion of Danton's party, but about complicated matters of Revolutionary France from the end of 1793 to early 1794. Colonel Bouchotte, the name of which is put as the title was one of the characters through those matters. He was attacked violently by Danton's party through Desmoulins's paper. Colonel Bouchotte was nothing but the director of Military Committee belonged to Temporary Administration Committee, an executive body of Revolutionary Government of Robespierrian party, but the matter in why he came to be attacked. About details of this attack, we found little accounts in materials so the problem why he was attacked was left unsolved. But after examining the Collection of Historical Materials of Comité du salut public" by Bouchez et Roux and Aulard, we found the facts that Hebert's party, as well as Danton's, moved searching for some profit to the Government and especially, the conflict between the two about military supply, was severe and then resulted in Desmoulins's attack against Bouchotte.
Notes	史学科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カミーユ・デムーラン (Camille Desmoulins) と
ブーショット大佐 (Colonel Bouchotte)

鈴木泰平

目次

序論

史料解説およびデムーラン略傳

本論 (一) 「ヴェウ・コルドリエ」研究

(一) 「ヴェウ・コルドリエ」發行の背景

(二) 「ヴェウ・コルドリエ」一號、二號

(三) 「ヴェウ・コルドリエ」三號、四號

(四) 「ヴェウ・コルドリエ」五號、六號

(五) 「ヴェウ・コルドリエ」の史料的价值と問題提起

本論 (二) ダントン、エベール兩派の研究

(一) アルフォンス・オーラルの所論

(二) アルベール・マティエの所論

カミーユ・デムーランとブーショット大佐

- (三) ジョルジュ・ルフェーヴルの所論
- (四) 史學史的研究に於る問題の所在

本 論 (三) ブーショット大佐の研究

- (一) ブーショットに於る問題提起およびエベール派とダントン派
- (二) ブーショットとエベール派
- (三) ブーショットとエベール派

結 論 陸軍長官ブーショット

あとがき 補註

序 論

カミーユ・デムーラン Camille Desmoulins と陸軍大佐ブーショット Colonel Bouchotte の組み合わせは、一見すると極めて奇妙である。パレ・ロワイヤル Palais Royal のカフェで民衆政治家として華々しいデビューをしたデムーランと大革命の發足以來革命政府の原則に忠實に生きてきたブーショット大佐とは、もとより何等のつながりを持つてゐたものではない。強いてつながりがあるとすれば、革命の原則に兩者とも従つてゐただけで、デスポティスムに對峙してゐた革命の枠内にゐたゞけのことである。問題は、しかし兩者の革命の枠内に於ける在り方の相異にあつた。こゝに本稿がこの兩者をとりあげて論ずる所以があるのである。従つて、本稿は兩者の何れかをとりあげて徹底的に論ずるのではなく、問題提起とその解決に必要な限りに於て検討を加えたに止まつてゐるのである。嚴密な意味に於ける史學史的見地よりすれば、新様な試みは或いは間違つてゐるかも知れないが、視點を狭くとり、それに關する可能

な範圍内の検討を加えると云ふのも、一つの行き方として許されるかも知れない。この意味に於て、本稿は専ら材料を彼の手になる新聞「ヴェウ・コルドリエ」に求め、これに若干の史學史的考察を加えて問題點の提起を行ふ方法に従つた。陸軍大佐ブーシヨットの登場は、この方法による問題提起の結果得られたのであつて、本稿の表題はこれに従つたものである。提起された問題の解明には存外検討すべき課題が多く、又相當の困難を伴つてゐたため豫定した分量よりは遙かに尨大になつて仕舞つたが、究明すべき課題の性質上止むを得なかつた。

本稿の體裁は一應カミーユ・デムーランの「ヴェウ・コルドリエ」の史料的介绍を多くしてゐるので、研究のポイントが二つに分れてゐるような感じを與えてゐるのであるが、これは單なる問題提起にとどまらず、敢えてデムーランと「ヴェウ・コルドリエ」を紹介する意味で長くなつたまでのことで別に他意があつた譯ではない。従つて課題のポイントが一つであることには違ひはないのである。

史料として利用し得たのは、アンリ・カルヴェ Henni Calve 編「ヴェウ・コルドリエ」(Le Vieux Cordelier)、『ブーシェ・エ・ルウ Bouchez et Roux 編「革命議會史」(Histoire Parlementaire de la Révolution Française ou Journal des Assemblées Nationales depuis 1789 jusqu'en 1815)、『オーラール Aulard 編「公安委員會史料集」(Recueil des Actes du Comité de Salut Public)、『カロン編 P. Canon 編「食糧委員會史料」(La Commission des Subsistances de l'All. Paris, 1925)、『カルノー報告資料」(Correspondance Générale de Carnot, Paris, 1900)、『アンリ・カルヴェ著「パリの恐嚇機構」(Instrument de la Terreur à Paris. Paris, 1947)等であつて、『ブーシヨット大佐』については、『エルロオ Herlaut, Colonel Bouchotte. (Paris 1946)』の傳記的研究に負ふ所が多

かつた。全般的には主としてブーシェに據つてゐるのであるが、ブーシェとルウの史料は屢々主觀的判斷を挿入してゐるので、微妙な判定と思はれるのは出来るだけ避け、客觀的事實を述べてゐる部分のみに據るよう努めてみた。

本文に入る前に一應、デムーランの略歴を御紹介するのは、略歴自體を伝える以外にデムーランの革命政治との事實上の接觸點を示すのに都合がいゝと思つたからで、その意味でそれ以外の所は詳しく入れてゐない。尙ブーショットについては行論の推移上本文に入れ、略歴と共にブーショットの問題點を示す方法に従つた。

尙、上述した史料について若干觸れてみたい。「ヴェウ・コルドリエ」の版本は全部で十二あるが、決定本とも云ふべきものはカルヴェの編纂になる一九三七年の版で、「革命の古典叢書」の一つとして出版されてゐるものである。この版本は元々マティエが心掛け、ソルボンヌのその演習に参加したカルヴェが、嚴密なテキスト・クリティクを加えて出来たもので、決定本と云ふのに應しい内容を持つてゐる。デムーラン研究には不可缺の資料と云ふことが出来る。デムーランは人の書いたものを豊富にとり入れてゐるので、その原本との比較、照合には多大の努力が拂はれて居り、特に古典の出所を調査するのは苦心のいる所だつたと思はれる。

ブーシェとルウの史料集は第一巻が一八三四年に出版され、最後の第四十巻は一八三八年に出版された。集録されてゐる内容は、事件の概容、議會の議事録、革命クラブ特にジャコバン・クラブの議事録、パリ・コムミュヌの報告、革命裁判所の記録、主要政務報告、豫算、新聞の抜粹等であつて、この間に屢々、編者の判斷が加つてゐるのである。集録のされ方が大體年次を追つて行はれてゐるので、事態の推移を追つてゆくのに便利であり、特に主要な公けの記録が入つてゐるのは貴重である。第一巻は始めにガリヤ以來のフランス小史が述べられ、三部會に至つてゐるが、格調の正しい高雅な香が漂つてゐる感じである。三部會の後では、特に革命の直接原因と題する記述が加えられ、革命への

展望を容易にしてくれてゐるが、その調子はやゝ古めかしく、道徳的な説教のような感じがしない譯でもない。恐らくこれは王朝の財政失敗を主として論じてくる所から出てゐるものである。ブーシェ・ルウの史料としての缺點は既述したように主觀的判斷が多過ぎる點であり、カルヴェも時折、その判斷に行き過ぎや誤りのあるのを指適してゐる。

オーラルのは、第一巻が一八八六年に出て以來一九二六年に一應完結し、以後、若干の索引を加えた。公安委員會及び地方派遣委員並びに臨時行政委員會の法令、告示、往復文書等を殆んど含み、恐嚇政治の表面からの研究には不可欠の史料である。編者のノート以外にはブーシェ・ルウのような編者の判斷は見られない。第三共和制發足直後、パリ市會からの寄附金でソルボンヌに革命史の講座が開かれたのが本史料集編集のきっかけとなつた事情は、余りにも有名である。カロンののは、食糧行政の責任官庁になつた食糧委員會の決定、布告を全て含み、地方的な動きも一應全部見ることが出来る。所謂生活資料のフランスの規模に於る概活的研究の根本史料と云えよう。全二巻で一九二六年の出版。カルノーのは、カルノーの地方派遣委員としての國民公會、公安委員會及び臨時行政委員會宛の報告書集である。軍隊と地方の恐嚇政治下に於ける實情を知るには、見逃してはならない資料である。フランス史未刊史料集の所収で、發行された年は一九三五年である。カルヴェとエルロオのは史料集ではないが、ほどそれに近い形をとつて居り、吾々にとつては貴重な研究である。

カミーユ・デムーランは一七六〇年三月二日、ピカルディのギーズに生まれた。幼時をギーズ裁判管區バイヤージュの副區長の父の下で過した後、長じてルイ大王學院に給費生として學び、八四年九月に大學入學資格を得た。翌八五年三月、學士號を與えられ、同年パリ高等法院付辨護士として法曹界に入つた。辨護士としては常軌を逸した粗暴な言動が多く、其の上、甚しい吃りのため失敗したが、生來の諷刺的ポエジーに富んでいたカミーユには、革命の切迫に従い幸運の道が

開けてゐた。「フランス人民の哲學」とネッケル罷免に對するアジテーションで聲名を得た彼は、その強烈な論調で屢々、政治家と黨派に打撃を與えた。マラー、エベールと並んで、彼は今や革命パリ民衆の有力な代辨者であつた。「自由なフランス人」、「パリ人への街燈の演説」によつて、彼は「街頭の檢事長」とあだ名をつけられたが、地方、ミラボーや王黨派のジャーナリストとも交りを結んでゐた。性格は案外弱く、多くの革命家の影響もあつて、當初の革命思想には一貫したものがなかつた。

ダントンについたのは九〇年に入つてからのことで、十二月にはリュシル・デュプレシ (Lucile Duplessi) と結婚した。結婚は彼に富と裕福な生活をもたらしたが、反面、彼の生活を墮落させた節もあつた。九一年六月には國王退位の請願代表としてパリ市役所に押し入り、その理由で逮捕狀を出されたこともある。ダントンのロンドン亡命後もパリに留つてジャコバン・クラブに出入し、九二年八月十日の革命後、歸國したダントンの臨時行政委員會委員就任と共にその秘書として政界に入つた。

この間、「假面をはがれたブリソー」、「革命秘史斷片」及び八九年以來の週刊紙「フランスとブラバンの革命」(Les Révolutions des France et de Brabant) によつて主としてジロンド攻撃に従つた。國民公會議員選舉にはパリから出て當選し、約一ヶ年在任したが、國民公會は何のポストも彼に與えなかつた。九三年六月二日のパリ・コムミューヌのクーデターの際、ダントンはジロンドとの通謀の容疑を受け、デムーランも同時にジャコバンの攻撃を受けたが、彼がダントンを擁護を決意したのはこの時であつた。更に六月二日革命後、舊貴族、獨占者及び外國人の陰謀を非難する強力な革命の波が彼に押し寄せてくるが、安易な彼の生活と極端なエゴイズムは、それを押し返す所か「恐嚇」の必要を感じないかのような感情を生み出してゐた。

九三年十二月、突然「ヴェウ・コルドリエ」紙を刊行し、エベール派攻撃の火の手をあげたが、ダントン流の溫和主義はロベスピエールに受け入れられず、エベール失脚後はその攻撃を逆に受けるに至つた。翌九四年三月、彼はダントン等と共に逮捕され、四月五日に革命裁判所で處刑された。年齢三十四。その妻リュシルも四月三十一日に處刑された。

本 論 (一)

(一)

このデムーランの略傳に據れば、彼の研究には革命政治史の全般的検討が必要となるのであるが、革命政治の推移を追つてゐた場合、彼が問題になるのは、カフェで煽動演説を行つて民衆政治家としての名を擧げたことと八月十日革命後、ダントンの秘書になり次いで國民公會議員に當選したこと及び國王退位の示威運動に參畫した事件等に限られてくるのである。しかし、これらのこともその時限りのことで、一貫した動きがある譯ではない。更に何等のポストにもつけず不遇の身をかこつてゐた公會議員時代には、彼の存在は殆んど忘れられてゐる有様で、専らダントンの陰にかくれてゐたその動きは革命のコースには無縁のものであつた。それ故、デムーランの向背が注目されたのは、「ヴェウ・コルドリエ」の發行とそれによるエベールとロベスピエールの攻撃と批判に過ぎないのである。

従つてデムーランの研究は「ヴェウ・コルドリエ」の検討が中心課題になる譯であるが、本稿では、單に史料的介绍と説明に止まらず、この中に現はれてゐる若干の問題をとりあげて検討する方法をとることとした。

「ヴェウ・コルドリエ」は、さて、如何なる事情により、如何なる意圖の下に書かれたのであろうか。デムーランが革命政治の表舞臺から殆んど遊離した生活をしてゐただけに、多分に吾々の興味をそゝるのである。このテーマについ

ては既にアルベール・マティエの論稿も發表されて居り、近くはアンリ・カルヴェ (Henri Calvet) の精密なテキスト・クリティクに基づく解説^(註)が發表されてゐるので、アルフォンス・オーラルの論評^(註)を交えながらその解説を中心にして検討を進めてみたい。「ヴェウ・コルドリエ」の第一號が創刊されたのは一七九三年十二月五日であるが、直ちに疑問に思はれることは、何故十二月五日と云ふ日が選ばれたかと云ふことであらう。この日付の問題の解明は、「ヴェウ・コルドリエ」の持つてゐる特別な使命とデムーランの革命政治家としての位置を、ほど明らかにすることになるのであるが、この前に九三年十二月前後の革命フランスが當面してゐる事態を展望することゝしたい。

サン・ジャスト St. Just、クートン Couthon、カルノー Carnot、フロー・デルボア Collot d'Herbois、ロベスピエール Robespierre 等の参加を得て再發足した公安委員會は、國民總員令 Levée en Masse、公定價格令 Maximum 等の實施によつて急速に非常體制の整備に努め、ツーロン、ヴァンデーの内亂鎮壓とワッティニの戰勝等の成果を得た。しかし、土地分割と物價對策を基幹とする社會政策は豫期した如き成果をあげず、事態はむしろ惡化の一途をたどつて居り、特に龐大な軍需補給はプロレタリアート層の生活を惡化させる一方であつた。

エベール Hébert、ジャック・ルウ J. Roux が彼等の期待に應えてモンターニュ派の社會政策の修正を求め、急進的な民衆運動を展開してゐたのはこの頃である。

他方、ブルジョアの社會層は政府の經濟政策に對して大きな不満を持つて居り、政府は、その直面する軍需補給問題の打開を計る意味でも、その據つてゐた統制主義^{エタティスム}を次第に逸脱する方向に向ふとしてゐたのである。

従つて、この兩翼からの攻撃、批判に曝されたモンターニュ派は恐嚇政治の運營手段を再検討せざるを得ない状態に置かれたが、これは同時にモンターニュ派の内部的對立を呼び起すことでもあつた。

この危機的様相を現はしてゐた段階に於て、もつとも注目すべき事件の一つは、非クリスト教運動の活潑な進展で、他の一つはインド會社の清算問題であつた。^(六)特に後者はダントン派に屬するファールブル・デグランティヌ Fabre d'Églantine、シャボオ Chabot、バジール Basire が關與し、その不正を追求されて逮捕されたために問題になつてゐたのである。デムーランは、この逮捕の裏には外國の反革命派に買収されたエベール派の策動があつたとしてエベール派攻撃の好機と判斷し、同時にその過激化した非クリスト教運動の阻止に動き出した公安委員會に乗じて、急據辛辣極まるエベール派の攻撃を企てるに至つた。

デムーランがダントンの意を受けて筆をとつたのは斯様な事情によるのであるが、これだけでは彼の決起した理由を説明するには充分ではない。

デムーランは九二年四月、「愛國者の法廷」^{トリビュヌ・デ・パトリオット}の刊行を試み、次いで「フランスとブラバンの革命」を發刊したことがあつたが、何れも永續せず、その上、ディロン Dillon ^(七)將軍の疑獄事件以後は文筆活動を絶つてゐたため、彼の著作活動には一年以上の空白があつた。この年余に互る沈黙を破つて再び筆をとるに至つた事情は、果して單純なエベール攻撃だけで説明のつくものであろうか。それとも彼は唯利殖のために動いたのであろうか。これもしかし、その動機を説明するのには充分とは云えない。と云ふのは、彼は國會議員としての収入と妻リュシル・デュプレシイの財産収入で、サロンと賭博場に時間を使ひ果してゐるような生活を送つてゐたからである。

このような動機がないとすれば、結局、自己防衛のためにどうしても筆をとらねばならぬ事情が他にあつたものと推測する他はない。こゝでまづ氣付くことは、ディロン將軍の事件以來彼が如何なる評價を受けてゐたかと云ふことである。ディロン將軍はヴァルミイの砲撃後、反革命派と見做され、ルイ十七世擁立の嫌疑を受けて告發されてゐたが、デ

イロン將軍がたまたまパレ・ロワイヤル賭博場の常連^{アビチュエ}であつたことから、彼はその一味として疑惑の眼で見られてゐたのであつた。

デムーランにとつて更に具合の悪いことは、その著書「ブリソー派秘史」*Histoire Secrète de Brissotins* に於てブリソーを共和派として描いたことが知られてゐたことである。ディロンの場合でも又ブリソーの場合でも、デムーランが反革命派として刻印を押されるだけの積極的な立證にはなり得ないのであるが、彼に對する評價の上に於てこれらが一箇の材料になつてゐたのは確かであつた。

デムーランは、他方、公安委員會に一つの恨みを抱いてゐた。それは食糧補給關係地方派遣委員ルジュヌ^{シュブシステンヌ}・エ・エーヌ *Oise et Aisne* 縣に赴任する際、その補佐官任命を拒否されたことである。^(八)

この補佐官に就任出来なかつた事情は、彼の反革命的傾向が事實上認められたものとして、エベール派の反革命派攻撃に絶好の手がかりを與えることゝなつた。デムーランが再びダントンに緊密な接近を求めるに至つたのは、この動きを知つてからのことである。

デムーランはその後アンリオ將軍 *Henriot* の副官デシャン^(九) *Dechamps* によつてジャコバンに告發され、益々自己辨明の必要を感じてゐたが、彼に對するこの告發は、彼を含めたダントン派に對する幅の廣い陰謀の一環に過ぎなかつた。何故ならばファールブル・デグランティヌ^(一〇)が外人陰謀の一味として告發され、バジールとシャボオが保安委員會に告發された動きの裏には全てエベール派が介在して居り、デムーランとダントンに對する告發、非難もその計畫に織り込まれてゐたからである。

保安委員會はその後、王黨派の銀行家バア男爵 *Baron Batz* をインド會社の清算經費でエベール派とプローリ

Proriを買収し、それによつて彼等の非クリスト教運動と公定價格制を強力に推進して共和國の運行に重大な障害を將來させたと言ふ廉で告發したが、この告發の狙ひは、バア男爵の背後にあるものとして見られてゐたダントン派にあつた。この告發も同様にエベール派の畫策によるものとダントン派は考へてゐたが、事實、エベール派のドゥローネ・ダンジェル Delaunay d'Angers とジュリアン・ドゥ・トゥルーズ Julien de Toulouse が逮捕される一方シャボオとバジールの逮捕も免れ得なくなることが分つてきたのである。

ダントンはこの告發に對して兩名の釋放を直ちに迫つたが、ダントン自身の立場も微妙であつた。それは、ダントンがデムーリエ將軍 Dumouriez の亡命後、ベルギー占領地經營政策の機密をプロリットに打明け、その上金融業者から買収されてゐる容疑を深く持たれてゐたからである。従つて、ダントンとしては兩人の釋放を求める以外に、エベール派の要求してゐるインド會社の問題と外人の陰謀に關する調査を中止させる必要があつた譯である。

他方、保安委員會の報告に接したロベスピエールは、非クリスト教運動の行き過ぎを共和國の存立に重大危機を將來するものとしてその運動の阻止に積極的になり出し、同時に外人の陰謀に直接關係あるものとして見られてゐたエベール派のプロリ、デエフィウ Desfeux、デュブソン Dubuisson、ペレイラ Pereira 等のジャコバンからの追放を決定するに至つた。ロベスピエールは此の後バジールの釋放に同意し、エベール派の策謀に對する彼の態度は漸く明確になつたが、この動きは、ダントン、デムーランにとつて、エベール派に對する攻撃の絶好の機會と映じたのである。

彼等はエベール派のショーマット Chaumette、モモロ Momoro 等がロベスピエールに終始妥協的に動いてきたのを機會に、エベール派に代つてジャコバンと公安委員會の指導權を掌握出来るものと判斷し、ジャコバン溫和派、聯邦派、上層有産者層の結集が出来れば、「恐嚇」の緩和と休戦が實現出来ると考へたのであつた。

情勢の變化につれて防戦一方のダントン派は、エベール派の攻撃のみならず、公安委員會の實權掌握も可能であると判斷し、相次いで公安委員會の政策、人事の攻撃に着手する。

ダントンが最初に攻撃したのは、カンボンの財政政策であつた。カンボンは平和回復に至るまで金銀貨の鑄造を禁止しようとしたが、ダントンは反對にその鑄造を認め、暗黙の中に商人、有産者層の復括を求めたのである。この結果、カンボンの提案は延期されたが、この場合に於るダントンの政治的勝利は疑ふべくもなかつた。

ダントンに續いてティオンヴィル (Thionville) とチュリオは、エベール派に屬して國民公令と取引を行つた容疑で陸軍長官ブーショット大佐 Bouchotte の罷免を求めたが、ビョオ・ヴァレンヌ Billard Varenne とロベスピエールはこれには強硬に反對した。ダントンは更にパトリオットを攻撃したのを理由にパリ・セクションを非難し、次いでアーヴル市のジャコバンによるアーヴル教會の接收をとりあげたが、十二月三日のジャコバン會議は何れも問題にはしなかつた。

ダントンがジャコバンの操縦が思ふようにゆかず、想像以上に自分が不人氣であるのを知つたのは、この十二月三日の會議に於てであつたが、同時に彼はエベール派の殘存分子が存外根強く國民公會のジャコバンにゐるのを知つたのである。ダントン派としては今や國民公會のジャコバンを押さえるには戦場を廣く求め、言論による戦いを進める他はなかつた。

「ヴェウ・コルドリエ」が十二月三日のジャコバン會議の直後(五日)發行され、それがダントン派の訴え得る最後の手段になつたのは、恐らく斯様な情勢によるものと見て差し支えないようである。

本來、恐嚇政治の緩和を求めてゐたダントン派は勿論、革命政府に好んで争いを求めた譯ではない。しかし、情勢の

推移によつて、ダントン派はエベール派を含む革命諸派から包圍されてゐると判斷したのであつた。^(二)「ヴェウ・コルドリエ」が終始自己防衛のため戦ひ、又その戦いが苦惱の連續に終つたのも當然肯ける所と云はなければならない。

「ヴェウ・コルドリエ」の發刊をめぐる事態の分析から、吾々が得られる革命政治上の問題は、急進派と溫和派の對立、恐嚇政治運用上の方法的對立及び反革命派の扱い方等に要約出来ると思はれるが、これらは元々大革命を流れてゐる共通のリズムであり、九三年末期のみの特異な問題ではない。唯、異つてゐるものは、その問題の度合が鋭くなつてゐることに過ぎないように思はれる。

「ヴェウ・コルドリエ」をめぐつて検討すべき點は尙多いのであるが、全七號に上るその内容を紹介しながらそれを素材として問題點の究明に當りたいと思ふ。

(二)

「ヴェウ・コルドリエ」第一號。^(一)

冒頭デムーランはイギリス首相ピットの才能に敬意を表した後、「フランス打倒のもつとも有効なフランス上陸プランは失敗に終つた。しかし、ピットの力が吾々の間に於てさえも強大なことはよく分るのだ」と述べ、エベール派がイギリス等の外人陰謀の手先としてファブル・デグランティヌとバジールを陥れたことを暗示する。次いで「ダントンが三色の蛇に飲み込まれようとしてゐる」と述べて、彼が同様にイギリスの手先の犠牲になりかゝつてゐることを示唆し、「共和國の初期の創設者の所業は倒れたが、ロベスピエールの市民精神のみがその廢址から立ち上り、外人の黨派によつて荒されたフランスの復活に努力したのだ」と力説する。デムーランは更に「フランスをとりまく凡ゆる危険の中から唯一人口ベスピエールのみがフランスを救つた：公安委員會の仕事に忙しい彼に代つて自分が筆陣を張り、眞實

を伝える」ことを約束する。

デムーランは轉じて「イギリスにも出版の自由がないが、フランスでも革命政府、軍人、ジャコパンの失敗を伝える自由も又伝える勇氣もない」として、間接的に政府の言論取締りを攻撃する。次いで、彼は重ねて「言論、出版の弾壓は人民を奴隸状態に落し、人間の理性に最大の侮辱を與える。他の仲間とは違い無位無官である自分は、思慮深い人に政府機關の活動情況と歴史の教訓と嘗つて存在した最大の政治家タキトウスとマキャヴェルリの意見を伝える」と宣言する。

この第一號に於る主題は外人の手先としてのエペール派の非難と不法な言論、出版の彈壓に對する抗議であるが、實際の狙いは目前に迫つたシャボオとバジールの逮捕を免れるためにインド會社の調査を斷念させることにあつた。

デムーランのこの意圖と共に強く感ぜられることは、シャボオとバジールの釋放に關して、ロベスピエールの援助を求めるの余り彼に詔い過ぎてゐることであらう。クラルティの云ふように、それは流石のビョー・ヴァレンヌやサン・ジュストの眉をひそめさせる程であつた。^(一四)この場合、直ちにデムーランとロベスピエールとの間に一種の盟約が成立したと考えるのは勿論、デムーランを見誤ることゝなる。何故ならば、デムーランの、この種の動きの中には屢々謀略的な動きが結びついて居り、多くの人から警戒されてゐたからである。

第一號に對する言論界の反響はさて、どうであつたであらうか。アンリ・カルヴェも述べてゐるように、^(一五)言論界には特に論争は起らなかつたが、彼の政略的意圖はその友人達によつて巧みに利用され、相當の成果を收めたのであつた。

ダントン派のアマール Amar は同日、國民公會で外人の手先を痛烈に非難し、メルラン・ドゥ・ティオンヴィル Merlin

de Thionville は逮捕された者と國會議員との間の自由な連絡を許可するのを求めたが、これはバジールとシャボオとの自由な連絡をとるのを意味してゐたのである。モントオ (Montaut) の反對によつて、これは結局實現しなかつたが、アマールはとにかく二人との連絡に成功したらしい。何れにせよ、二人の釋放を求めて「ヴェウ・コルドリエ」とティオンヴィルとの間には明らかに連携動作がとられてゐるのが分るのである。

デュリオは次いで十二月七日に嫌疑者法で逮捕された^{パトリオット}革命派の釋放を迫つたが、公安委員會委員クートンはその實情調査を約束し、この結果、革命政府の機能に一つの重大な打撃が加えられることゝなつた。シャボオの友人のシモン Simond はこれに乗じて^{シモン・エテボジュール}人民結社による實情調査を求めたが、ロベスピエールは政府機構以外の機關にそれに當らせることが、結局その政治的特權を認める結果になるとして反對したのである。何れにせよ「ヴェウ・コルドリエ」の發行とそれに伴ふ一連の動きが溫和派の本格的な戦ひに一つの突破口を作つたのは確かであつた。

「ヴェウ・コルドリエ」第二號。^(二六)

二號はデムーランがデシャンからジャコバンで告發され、それに對して沈黙してゐた事情の説明から筆が起される。デムーランはこの後、直ちに「共和國を脅かしてゐる唯一最大の危機が何であつたか」この一年來よく理解出來た」……それは、眞實のパトリオスムが急進的なパトリオスムによつて失はれる危険であつた」と云ふ。次いで「マラーこそが眞實のパトリオスムの具現者であり、反革命の擬裝を見破つた優れたパトリオットであつた。彼の死後ロベスピエールが代つてその役割を果した」と述べ、「奴隸と法王とが結びついた宗教とは別の、政治から僧侶が全く離れてゐる新しい宗教が必要であるが、……必要以上の非クリスト教運動は民衆の本質的な信仰心を傷けるものだ」と指摘する。

二號の主題が、極端な非クリスト教運動を推進してゐるエベール派の攻撃に置かれてゐるのは明らかであり、その内容は一號以上に具體的になつてゐるのであるが、ロベスピエールが公然と非クリスト教運動を非難してゐる場合に當つてゐたため、その論調は前號以上に彼に詔る形をとつてゐるのである。

二號の分量は一號より確かに多いが、これは宗教問題に關する蒙古その他の未開民族の例證が多く引かれてゐるためで、政治的論議が殆んど含まれてゐないのが本號の特色であらう。しかし、よく検討してみると、彼の宗教政策に對する態度には公安委員會のそれとは離れたニュアンスを湛えて居り、實質的にはロベスピエールの宗教政策の批判を含んでゐると見るのが正當のようである。デムーランにとつて我慢が出来なかつたのは、ロベスピエールが「最高存在」に深入りし過ぎてゐたことで、彼の革命政府に對する攻撃とそれからの離反の萌芽は、既にこの號あたりから見られると云つても過言ではない。

(三)

「ヴェウ・コルドリエ」第三號。

オーラールが革命政治史でも指摘してゐるように、第三號は明白にロベスピエールと恐嚇に對する批判と非難に満ちて居り、全號を通じてもつとも精彩を放つてゐる部分である。

「君主制と共和制の根本的な相異點は、前者が怠惰な生活を本質としてゐるのに對して後者が徳の追求を本質とする所にある……共和國の長所は自ら改革する力を持つてゐることだ」と述べて、デムーランはリシュリュウとサリュウストの古言を引用してそれを立證し、次いで「新しい勇氣を持った市民に、二千五百萬に上る民衆の永遠的解放のために流された血汐を革命の廣場で見せる前に、民主制の下で多くの腐敗が見られた特にローマの皇帝政治を省りみせた

と云ふ。彼はこゝで、タキトウス^(二〇)を引用して、古ローマに幾多の国家と君主に對する不敬罪を規定した法と、とるに足らぬ日常の生活までに及んだ多くの反革命處罰法があつたが、たとえルイ十六世の統治がそれに似てゐなくとも、現在、デスポティスムの手段としてより以上の「恐嚇」を欲してゐる専制君主がある……フランスに於る自由と隸屬の二頭政治は、シャン・ド・マルスの虐殺以來、至る所で見られたが……立法權を持つてゐるものによつて辛じてその混亂が避けられた……現在、共和國の創設者を冷酷に扱つてゐるのは過激派であり、反對にその行き過ぎを阻止し、反革命の烙印を押されてゐる者を解放する目的で、牢獄の解放を求めてゐるのは吾々溫和派である……ピットはモーニング・ポスト紙と同様フランスに言論發表の自由がないと云ふが、言論出版の自由のために全力を盡す」ことを誓ふ。最後に、彼は「共和國の格率は、一人の無實の者を追求するのに數人の容疑者を罰することにはなく、君主制の格率は、一人の容疑者を所罰から免れさせるため數人の無實の者を罰することにある……タキトウスの云ふデスポティスムが現在、フランスでは自由と呼ばれてゐる」と結んでゐる。

第三號が出版されたのは、第一號の發行後十日間を経過してからのことであるが、(十二月十五日、共和曆フリメール二十五日)注意すべきことは、この間、デムーランの論調が著しく變つたことである。從來かげにひそんでいたダントン派の見解が著しく前面に押し出されてきてゐる他は、ロベスピエールに對する詔ひは全く見られないのである。バントボール Bentabole がエベールをジャコバンに告發し、ブルドン・ドーズ Bourdon d'Doise が公安委員會の刷新を國民公會に求め、更にファール・デグランティエヌがジャコバンの肅正を叫んだ如き一連の事實は、明らかに「ヴェウ・コルドリエ」の主張と符節を合はせてゐるのを思はせるが、これに對してデムーランが喚問を受けるに至つたのも

至極當然のことであつた。この喚問を受けたジャコバンの會議に於て、デムーランがロベスピエールから横柄な扱ひを受けたとオーラルは述べてゐるが、事實は反對で、彼は最高の稱讃の言葉を捧げられ、ダントンに對する扱いもクラブの空氣も一變する程であつた。従つて、この會議に對するオーラルの判斷は誤りであつたと云はなければならぬ。

第三號が出版されたのはこの會議の翌日であるが、それだけに、ロベスピエールの憤慨が激しかったことは想像される所である。何れにせよ、三號の前半の目標が嫌疑者法と革命政府の攻撃に置かれ、後半のが反革命派の烙印を押されてゐたものゝ釋放を促すことにあつたのは明らかであり、又フイリッポオの釋放とコロ・デルボアへの攻撃もその主な狙ひになつてゐたのである。換言すれば、デムーランはジャコバンの同調を得てエベール派を倒し、恐嚇政治の緩和を表立つて要求した譯である。

この動きに對して、始めは余り警戒心を抱いてゐなかつたロベスピエールも、エベール派が鋭く反擊に轉じてから漸くその危険性に氣づいてきた。三號の發行直後、公表された「革命政府の諸原則」が部分的にせよ「ヴェウ・コルドリエ」に對する反論の形をとり、過激派と溫和派の非難にのり出してくるのには、斯様な事情が伏在してゐたのである。

さて、第三號に對するパリの反響は異常に大きいものであつた。二號の場合とは違つて、パリの民衆は反革命派として扱はれてゐた者と同じく壓倒的にこれを支持し、想像を絶した興奮状態が湧き起つた。他の新聞が全く沈黙を守つてゐた際、デムーランが敢えて眞實を語つたのが特に印象的であつたらしい。

この意外と思はれる反響は一方、ダントンの行動に一層の大膽さを加えた。再度にわたる公安委員會の改組の要求、旧貴族、旧僧侶身分出身の地方派遣委員からの罷免及びブーショット大佐の罷免要求は、今までになくジャコバンを揺り動かして居り、ロンサン Ronsin の罷免は明瞭に國民公會とジャコバンの大幅な同調を得てゐる證據であつた。

ダントン派の攻撃はしかし、インド會社の偽清算書の發覺とコロ・デルボアの復歸^(二四)によつて思ひがけない障害に當つた。ロンサンの辨護にコロ・デルボアが加はり、更にロベスピエールがインド會社の清算に關してファール・デグランティヌに嫌疑をかけて以來、ダントン派は急速に退潮の色を濃くしてゆくのである。

「ヴェウ・コルドリエ」第四號

十二月二十四日に發行された第四號は、^(二五)多くの同調者の期待を裏切り、三號とは打つて變つたニュアンスを湛えてゐた。

デムーランは始めに第三號が正當な評價をコロ・デルボア等から受けなかつたのを遺憾であると述べた後、「フランスの現下の情況が自由から程遠い段階にある」とし、「民衆が自由になりたいと欲した時にはいつでも自由の状態になれるようにすべきである」と強調する。次いで、自由とは弱々しいものではなく力と厳しさとを持つべきもので、自由が生んだ財産——人權宣言、共和制の原則、博愛、平等——を守るためには進んで戦ふべきである」とし、續いて「自由を虚名に終らせず、オペラのニンフにも止まらせず更に理性、平等及び正義に値する神聖なものにするために自由に應はしい政治を行ふべきだ」とした後、「單に容疑を受けただけで入獄させられた者の釋放」を求める。

デムーランは更に語をついで、次のように述べる。「古のアテネは、政府の改革を求めただけでは入獄させなかつたし、革命を單なる好奇心で見てゐるような者もいなかつた。フランスの革命が人を惹きつけてゐるのが、革命の持つてゐる特殊性のみで、共和國に對する愛でないとすれば、斯様な状態は恥かしさと愚さに満ちてゐると云ふ他はない。恐嚇^{テリユール}を政治の日程にいぜんとしてのせようとしてゐる人とは違つて、その緩和を斷行し得る者のみがつとも革命的であると云えないであらうか。

アテネを席捲した後、融和政策を成功裡に終えたローマの指導者は果してブリソー^(二六)派と云えるであらうか。ギリシ

ヤ、ローマの古い歴史は溫和な融和政策の成功した實例で埋つてゐるではないか。このことは、賢明さを伴つた緩和政策が、結局もつとも有効な革命的方法であることを立證してゐるのではないであらうか。賢明なキケロも云つてゐるように、恐嚇は一日限りの指導者に過ぎない。私が溫和派としての信念を曲げないのも斯様な理由に基いてゐることを知れば、人は私を理解してくれるであらう。溫和主義は理性に基かないと、より以上の危機を醸し出す。それ故、緩和政策はフランス民衆に應はしい偉大なイデーに據らなければならぬ。

人も知つてゐるように、公安委員會の政策をこれ以上過激にしないで、正しいパトリオスムに應えた人がある。私の親しいロベスピエールよ。私がこゝで呼びかけてゐるのは、あなたなのだ。私はこの目で親しくあなたがピットに打ち勝つた瞬間を見つめてゐた……あなたなしには、共和國は存續出来ないし、云はんやジャコバンとモンターニュのクラブははかないバベルの塔になる。歴史と哲學の全ての教訓を想い起させてくれたのもあなただし、過激に走らない公正な動きを果す機構の設立を提議してくれたのもあなたなのだ。

それなのに共和國では、何故融和政策が罪になるのだらう。吾々がもつとも自由な、もつともデモクラティックなアテネ人より更に自由になりたいとでも云ふのであらうか」。

四號を見て直ちに分ることは、緩和政策を求める調子が以前のとは變つてきてゐることである。多くの歴史的先例に(二七)照してその妥當性を論證した後、彼はそれに連るものとしてロベスピエールを引き合いに出し、それによつて緩和政策の實施により強い手掛りを得ようとしてゐる譯であるが、三號の場合と違ひ、こゝに示された調子は、ロベスピエールの親友のようでもあり、又泣訴を續けてゐるかのようで著しい變節振りが特徴と云えよう。

さて、こゝで問題になるのは、デムーランが、果して緩和政策を現實に可能性のある政策と考へてゐたかどうかと云ふことである。彼は内外共に危機的段階にあるフランスに對して、その政策を有効な革命的方法と考へてゐたのであるうか。又それが國際的に見て、フランスの弱體化を示す有力な材料になるとは考へなかつたのであらうか。^(二八)若しデムーランが斯様なことを考慮に入れずに云つてゐたとすれば、結局彼は單に革命政府を殊更困難な立場に追い込む他に眞意がなかつたと云ふことになるのである。

要するに四號は、ダントン派の直面した困難を切り抜ける手段として一時ロベスピエールと妥協し、それによつてエペール派の過激な動きを索制すると共に恐嚇の緩和に努め、更に出来れば反革命派全般を結集し得るような組織的な緩和政策を推進するのを目的としたものと云えよう。斯様な動きは云ふまでもなく、反革命派の動きに最大の警戒を拂つてゐる公安委員會の見逃す所ではなかつた。又、第四號の發行を待望してゐた人々にとつても、この不必要なまでの緩和政策の推進は問題になつてくるのである。

バレール Barère は十二月二十六日の國民公會に對し、デムーランの主張が旧特權階級の復活を著しく促進する恐れから「ヴェウ・コルドリエ」の檢閲を求めてゐるが、これに對して公會がそれを認めてゐたのも、^(二九)恐らく斯様な事情の一つの現はれとも云えよう。

四號は從つて三號とは異り、反革命を促進する危険な信號と見られ、三號の場合に見られたような響は到底生み出すことが出来なかつた。デムーランの政治的タクティックスの拙劣さと情勢判斷の甘さはここにも見られるのであるが、斯様な失敗はこの場合のみに見られるような特有のことではない。

「ヴェウ・コルドリエ」第五號^(四)

五號は翌九四年一月五日に發表されたが、本號には「ジャコバン・クラブに於るカミーユ・デムーランの辨明演説」と云ふ副題が添えられてゐる。この副題はデムーランの告發をめぐるデムーランとジャコバンの論争に關して、彼自らジャコバンに自分の立場を納得させる氣持からつけたものらしい。

デムーランの辨明は凡そ次の如きものである。「共和國の船は溫和主義と過激主義の間を漕ぎ始めた。私は私に對する中傷が事實無根であることを證明するため、自分の抱懷する政治的信條を吐露し、『ヴェウ・コルドリエ』の發行を續けてゆく。私はかつてダントンと共に、共和國の船は溫和主義の泥洲よりも過激主義の岩礁に沿つてゆく必要があると云つたことがある。だが、エベール派が甲板で溫和主義に融れないように注意するばかりで、必要な哨戒を怠り勝ちの現在、私はその注意を促す義務があると思ふ。既にロベスピエールもヴィヨオ・バレンヌもその危険を感じてゐるのは周知の所だ。

ネッケル罷免の報に接して、私がデスポティスム打倒に武器をとれと叫んだ、あの革命的な情熱と眞實の共和的理想は忘れられたのであろうか。私の目的は凡ゆる裏切者と新しい陰謀者の假面を引き裂くことにある！私がディロン將軍を辨護したのを、何故人々はいつまでも非難するのか。それならば、ロベスピエールが私を辨護したのは何故非難されないのか。又何故彼は罪に問はれないのか。私は單にディロン將軍が公けの裁判で審判されるべきだと云つたに過ぎないではないか。ツーロン軍港の失敗の責任を問はれたエベールはそれならどうなるのだ。フィヤン派の親王バレールは……陰謀の親方コロ・デルボアはどうなるのだ。妻の収入の四千リーヴルが何故こんなに騒ぎになるのだ。何故それが不正なのか。若しそうならば、ダントンを中傷するため、貧しいエベールが新聞發行用にブーシヨットから受けとつた

十二萬リーヴルはどうなのだ。彼はフランス國民と共和國から公金を盗んだではないか。マラーの人氣を相續するため「ペール・デュシェーヌ」をフランス民衆の金で買収したのは誰なのだ。私のいつも念頭にあるのは民衆の幸福と繁榮だけだ。そのために發行してゐる『ヴュウ・コルドリエ』から私は何の金銭的利益を期待してゐるのだろう。私を反革命派とモデルと極めつけてゐる人は、國家から金を盗んで新聞を發行してゐるではないか。私はいつも七月十三日の勇氣と熱情を湛えてゐる。言論の自由がなければ死を選べ！。新しいブリソー主義を擬裝してゐるエベール派と溫和主義の間にバランスをとる必要は何處にあると云ふのか。ブーショットに操られてゐる『ペール・デュシェーヌ』とエベールを倒せ！」。

デムーランは最後に、エベールが「ペール・デュシェーヌ」發行に當つて、九三年十月現在、四萬三千リーヴルの利益を得てゐると誌して五號を終えてゐる。^(三二)

五號を通じて出てきてゐる特徴は、副題の示すように一身上の辨護に終始してゐることと國家のことを常に念頭に置いてゐるかのように見せかけ、それによつて自分の立場の強化を計ろうとする點である。こゝに現はれた辨明はしかし、單なる立場の辨護ではない。デイロン將軍の辨護にはロベスピエールの手段を模倣してその立場の有利な展開を計り、エベールその他の者の攻撃に對しては辨明よりも積極的な反擊の形をとつてゐるのである。

同様なことは、「ペール・デュシェーヌ」の攻撃を行ふ場合にも見られる所である。處で、事實はデムーランにとつてはもはや國家の制度も法の批判もいづれもどうでもよいことであつた。問題になつてゐるのは個人的な政敵のみである。ファール・デグランティエヌに對する容疑が深まり、インド會社の不正と外人陰謀に對する調査が進むにつれて個人攻撃の色彩は益々強められてゆく。特に、ダントン一派の調査に従つてゐたコロ・デルボアへの攻撃はエベール

に對するよりも激しさを増してゐたのである。

デムーランが斯様な形で辨論を試みる必要があつたのは、勿論反革命の刻印を押されるのを免れるためで、そのために彼はダントン派を通じてジャコバン・クラブに猛烈な工作をしてゐるのであるが、それは明らかに失敗に終つており、ロベスピエールに依存しようとするればする程苦境に陥つてゐたのであつた。ロベスピエールはその自己辨解的な仕方が反つて惡意のある證據であると云つてゐる位であるから、彼が孤立してゆくのは決定的であつたのである。

五號からこれ以上のことを吾々が引き出すのは、恐らく困難であらう。既に始つてゐた「デュシェーヌ親爺」と「ヴェウ・コルドリエ」の論争とジャコバン・クラブに於るエベールとデムーランとの對決を通じて、デムーランは急速に最終的な審判に服することとなるのである。

この五號の記事と平行して、一月五日のジャコバン・クラブの議事録を檢討して見ると、デムーランの立場と溫和派と過激派の争いの輪郭がさらに明瞭になるように思はれるので、こゝでその大要を紹介して置きたい。

デムーラン、フィリップオ、ブルドンの告發を受けたジャコバン黨内の委員會は、兩派の論争の進むにつれて早急に結論を出す必要があつた。委員會の主任者格に當るコロ・デルボアは討論の結果、フィリップオを軍人侮辱の廉で有罪にし、デムーランを不問に付して、『ヴェウ・コルドリエ』の事前檢閲を決議したのである。

この決定に對して、兩派の應酬は更に激化し、エベール派はより以上の嚴格な革命裁判の實施を求め、デムーラン等は放漫な國庫支出の是正をもつて對峙し、兩者共譲り合ふ氣持は全く見られなかつた。弟のロベスピエールが非クリスト教運動の責任をエベールに問い、且個人的紛争にジャコバン・クラブが關與するのに反對したのはこの時である。^(三三)

ロベスピエールは、しかし、この個人的紛争を無視するには事態は余りにも深刻であると判斷し、デムーランの新聞

記事の検討は暫く措て、フィリップオの中傷事件だけを審議する動議を出した。

次いでジャコバン・クラブの討議を追つて、國民公會は一月十日、ブルドンの國庫補助金の監察とエベールへの十二萬リーヴルの補助金に關する討論に入る。^(三五)ブルドンに引き續いてダントンは、この會議から臨時行政委員會の承認を得ない限り、各行政長官が個々に補助金を交付できない決議をとりつけ、更にロンサン將軍を告發したフィリップオの辨護に努めたが、國民公會に關する限り、ダントンの勝利が明白に思はれたのはこの時である。しかし、同日の夕刻のジャコバン會議ではダントン派の形勢は全く不利であつた。それは、この會議にダントン派が殆んど缺席し、反つてロベスピエールに「紛争を起した者が現實を逃避してゐる事實」^(三六)を直視させ、彼に新しい危険なブリソー主義を非難させる機縁を作つたからである。

この會議に遅れて出席して唯一人その立場を辨明したデムーランに對しても、ロベスピエールは峻嚴な態度を示し、彼はその言論には貴族と反革命派の鋒起を促す危機があり、たとえ、キケロやデモステネスの諷刺的言説を用ひてゐるとは云え正しく用いられてゐる譯ではないとして、『ヴェウ・コルドリエ』の廢刊を命じてゐるのである。

ロベスピエールにとつて特に問題であつたのは、自己辨解の要素が強過ぎたことで、その裏にある政治的策謀を特別に警戒してゐた譯であつた。デムーランはこの處置には不満で、貴族以外のもの——國民公會もジャコバンも「ヴェウ・コルドリエ」を見てゐる以上、ことさら、貴族だけに購讀禁止の處置がとられるのは理解出來ないと反論したが、^(三七)彼がロベスピエールから見離されたのは決定的事實であつた。

ロベスピエールはその溫和主義が革命原理にもつとも危険なもので、貴族の陰謀と反革命を促進する溫床であると更に斷言してゐるが、^(三八)これによつて「ヴェウ・コルドリエ」の三號と五號の検討は、もはや問題にならなくなるのである。

る。

ロベスピエールは又、デムーランとファール・デグランティエヌならびにフィリップオの處斷を明確に區別し、「ヴェウ・コルドリエ」の企圖を見事に紛粹したが、これはデムーランを決定的に反革命派に追ひ込む結果を伴つたのである。デムーランはジャコバンからの追放だけにとどめられたが、これは要するにデムーランがダントンの派の單なる手先に過ぎないことをロベスピエールとジャコバンが認めたことを意味したに過ぎない。

この議事録によつても分るように、第五號の卷き起した反響と紛争は「ヴェウ・コルドリエ」刊行以來最大のものであつたが、結果に於いては、ロベスピエールに溫和主義も過激主義と同じく共和國に危険であると云ふ材料を提供したに過ぎなかつた。その上、これは、デムーラン自身の評價に對する絶好の素材になつたのである。

「ヴェウ・コルドリエ」第六號

五號で受けた致命的打撃にもかゝらず、デムーランは一月二十五日に第六號(三九)を發行した。その趣旨に従えば、ファール・デグランティエヌが逮捕され、多くの反對派に傷つけられた自分の信用をとりかえすために敢えて筆をとつたと云ふのである。六號の要は次のようなものである。

「人々は私の云ふ溫和主義によつて貴族が喜び、ピットの金で私が新聞を發行したと話してゐるが、これに對する最良の解答は『ヴェウ・コルドリエ』の『政治的信條』クレド・ポリティクを發表することだ。自分は今でも、八九年七月の場合と同じく、共和制とデモクラティーがフランスに適合する唯一の原則であると信じてゐる。最上の革命的方法と共和國を救ふもつとも効果的方法について、キケロやブリュタスの場合のように、意見の違いがあるのは止むを得ない。(四〇)自由の回復。こ

れこそ凡ゆる方法の中で最上のものなのだ。しかし、自由の再建には出版の自由と經濟的ギョティエ(四二)ヌからの解放があれば充分である。議會は際限のない意見の對立があればこそ成立する。自分は以前、緩和政策と云つた際、それを『公正な政策』の意味で云つたのだが、以來ジャコバンも凡てのモンターニユもそれを危ぶみ、私を反革命とみなしてしまつた。ソーロン軍港の陥落の際、緩和政策は一笑に付されたが、その實、人々が欲したのは『デュシェーヌ親爺』の拍車ではなく『ヴェウ・コルドリエ』の手綱であつた。同様なことは、義父のデュプレシイ(四二)の逮捕についても云えることだ。

『政治的信條』クレド・ポリティクに戻ろう。自分の云ふ自由とは、人權宣言の原則の不可侵性、博愛、平等及び徳ヴァエルチュであり、一言につくせば幸福と云ふことだ。革命下に於る神聖な政治とは、自由にかけられてゐるヴェールを凡てはぎとることである。自由とは苦惱、非滲ではない。自由な民衆とさうでない人を區別する要は、前者には苦惱がなくて自由があり、後者には自由がなくて苦惱のみが存在することである。共和的政府の存在理由は自由と富の蓄積を促す所にあるが、イギリスとフランスを比較した場合どうであろうか。

自由を促進するためにピットから金を受とるのは自由であろうか。自由とは盗みと剝奪の平等ではない。『ヴェウ・コルドリエ』を非難した者は私の『ブラバンとフランスの革命』を読んでゐない人であるが、その人々は私のブリソー派に對する攻撃も『パリ街燈の演説』も想ひ起してくれない。彼等はそれを私の人類愛への夢と云つたり、溫和主義を古臭さいユートピアと云つたりしてゐる。

エペールは國庫から補助金を得て安く新聞を賣つたが、私ののは高いため又辨明が長過ぎたため余り賣れなかつた。今後はサン・キュロットに讀まれるように心がけよう」。

六號の正確な發行日は分つてゐない。アンリ・カルヴェは恐らく一月二十五日かそれより少し早目であつたらしいと云つてゐるが、何れにせよ、五號より大分遅れて發行されたのは事實である。この遅延した原因として考えられることは、ジャバンと國民公會の支持が失はれたこと以外に一月十二日にファール・デグランティーヌが逮捕され、續いてデムーランの義父デュプレシイが二十三日に告發されたことであらう。

六號は従つて、デムーランが自分の身邊に危険の迫つてゐるのを知つて書いた譯であり、人身攻撃よりも自己辨明の形で反革命派ではない理由を盛る必要があつた。彼は、これを政治的信條の告白と云ふ形で現はし、自由の再建の中に理想的な共和國の樹立を強調することによつて、反對派の疑惑を解こうとしたのである。しかし、政治的信條の告白と云ふ大袈裟な表題にもかゝらずその告白の内容は至つて貧弱で、たゞ繰返して緩和政策と自由とエベール派への非難が述べられてゐるのに過ぎない。従つて、信條は内容的には全く空疎であり、信條ではなくて、政治行動の辨解に終つてゐるのである。

この告白に關聯してデムーランが行つてゐる時評の中で、一つ注目すべきことは、恐嚇体制下の經濟政策に對する提言である。パリのパンを中心とする食糧危機が益々悪化してゐる最中に於て、思ひ切つた自由政策を提唱したのは確かに政府にとつては手痛い批判であつた。

こゝには、又凡ゆる機會を捕えて政府（公安委員會）を窮地に陥れようとする彼獨自の動きが現はれてゐるのを吾々は見出すことが出來よう。

(五)

「ヴェウ・コルドリエ」は尙第七號及び若干の斷章を數えることが出来るが、これらは生前に出版されてゐないし、

又デムーラン自身の校訂したマニエスクリプトに據れない憾みもあるの^(四三)で、「ヴェウ・コルドリエ」の史料的紹介と解説はこの六號で終はるのが適當であるように思はれる。「ヴェウ・コルドリエ」を通じて検討すべき問題は恐らく革命政治の凡ゆる領域に亘るものであるが、こゝでは一應、史料的紹介を通じて浮んできた若干の問題に絞つて検討してみたい。この全六巻を通じて流れてゐる一貫したモチーフは、緩和政策の實現を通ずる第二次公安委員會への反抗とエベール派に對する鬭争である。豊富にもりこまれた歴史的事例の引用も、自由への理想も、所詮、このテーマに吸収される小さな流れに過ぎないと云つても過言ではない。

こゝでもう一度検討して見たいと思ふのは、この緩和政策が九三年の危機的事態に於て果して適當であつたかどうかと云ふことである。史料的紹介の部分で、適當ではないと云ふ積極的論證が出来ない限り、デムーランの眞意は要するに、政府を窮地に陥れることであつたと吾々は考えたのであるが、更によく考えて見れば、緩和政策は窮局的には和平政策であり、國際的觀點よりすれば革命自體の疲弊と弱體化を意味する他、何ものでもないのである。これは、換言すれば、革命的所産までも犠牲にする敗北主義に通じて仕舞ふ恐れが多分にある譯である。^(四四)

デムーランは又、同調者を多數集め、權力を掌握し得るような場合には國民公會の多數の反抗も押し返して行動に出る意圖をほのめかしてゐるが、これは、機會があれば國民公會に對する暴力的叛亂に出ることであり、この叛亂は結局反革命の陰謀に歸して仕舞ふのである。

従つて、デムーランの緩和主義は國境に於ては敗北主義であり、國內に於ては反革命陰謀であると云ふ一つの明快なラインが出てくるのである。

次に考えてみたいのは、九三年より四年にかけて精力的な活動を續けてゐる公安委員會に對する組織的な反抗は如何

なるものであるかと云ふことである。緩和政策の實體が斯様なものである以上、その責任を問はれた場合、直ちに問題になるのはデムーランである。しかし、この組織的反抗が「ヴェウ・コルドリエ」を媒体にして行はれ、しかもそれがダントン派の凡ゆるものゝ辨護と主張と政治的操作を伴つてゐる以上は「ヴェウ・コルドリエ」はデムーラン個人ではなく温和派全體の新聞であると云はなくてはならない。何れにせよ、「ヴェウ・コルドリエ」は第二次公安委員會の崩壊を計畫し、その實現のために第二の五月三十一日の革命を夢みてゐたのは確かであつた。「ヴェウ・コルドリエ」は要するに、ダントン派の政治的武器に過ぎなかつたと云ふのが第二のポイントについて吾々が引き出せる結論である。

次ぎにエベール派との抗争は如何に考えるべきであらうか。「ヴェウ・コルドリエ」はあきることなく反覆してエベール派の過激主義を攻撃し、それが反革命に走る恐れを述べ立てゝゐるが、その眞意は如何なるものであつたであらうか。

これに答える前に吾々は先づ「ヴェウ・コルドリエ」を通じて浮彫されてきたダントン派の政治的構想を描いてみよう。ダントン派は明白にロベスピエールの支持を得てエベール派を倒し、次いでロベスピエールの失脚を狙つてゐた。これに對して、ロベスピエール派はダントン派を頼つてエベール派を倒そうとし、そのためにロベスピエール派は「ヴェウ・コルドリエ」を通じて行はれてゐた凡ゆる攻撃、凡ゆる中傷に耐えてゐたのである。ダントン派はサン・キュロットの支持を失えばロベスピエールは倒れると思つてゐたし、事實その可能性も少からずあつたのである。ダントン派は更にデムーランに對して友好的態度が示されその共和的理想が支持されてゐると確信してゐたが、頼みにしてゐたサン・キュロットは存外ロベスピエールを離れず、又ロベスピエールはダントン、デムーランとの舊い友好關係を斷

ち切る決心をつけて居り、こゝにダントン派の大きな誤算があつた。ロベスピエールはエベール派の打倒に見通しを得てダントン派の利用價值がなくなつたと判断した後、彼等には一顧も與えなかつたのである。「ヴェウ・コルドリエ」はこの點での情勢分析が甘かつたこととロベスピエールに對する不必要なまでの卑屈な態度を見せることによつて反つてその眞意を見破らせる材料になつてゐた。

従つて、エベール派に對して強硬な態度をとつてゐる限り、ダントン派とロベスピエールの妥協の余地はあつたが、「ヴェウ・コルドリエ」は余りにも「緩和」を唱ひ過ぎたため反つて政府の警戒心を誘ふことになつた。更にそれは王黨派と反革命派に復活の氣運を與え、次いで巨大な反對派としての云はゞブロックとしての行動を誘發する恐れを持つに至つて政府にとり最大の恐るべき武器になつたのである。^(四五)これは他方、エベール派にとつてはダントン派と闘ふのに

絶好の機會であつたが、ロベスピエールが先きにダントン派と提携してエベールを索制したため、エベールは充分この機會を利用することが出来なかつた。従つて逆に云えば、ダントン派の對エベール闘争はロベスピエールの支持を得てゐる限り樂に進められてゐた譯である。處で、この對エベール闘争に於て注目すべきことは、過激主義の反革命に走る恐れを云いながらも、攻撃の目標が一人の人物に集中されてゐると云ふ事實である。この問題は如何に考えるべきであらうか。この問題については暫く措いて「ヴェウ・コルドリエ」に關する残つた問題を處理することゝしたい。

「ヴェウ・コルドリエ」は前述した如く、反革命派をブロックとして行動させる恐れを醸し出したが、それは又思ひがけずこの間の反革命派に於る凡ゆる反革命的なデッサンを暴露することにもなつてゐた。これは恐らく「ヴェウ・コルドリエ」の發刊が將來した奇妙な効果の一つであつたに違いない。^(四六)

「ヴェウ・コルドリエ」がその戦いを有利に進め、危機を促進したと云ふ點については、よくその持つてゐる文學的

價值と説得力が問題になるのであるが、これはしかし誇張され過ぎてゐる嫌ひがあるようである。たとえばオーラーはデムーランの文學的才能を「プロヴァンシアル」と「キャンディド」の作者に比肩すると云つてゐるが、オーラーは明らかに行き過ぎで、カルヴェの云ふように一つのジャンルの創造者と追隨者を同一視し過ぎてゐる觀方である。

「ヴェウ・コルドリエ」について次ぎによく云はれるのは、デムーランの文章にギリシャ・ラテンの古典の引用が多く、この點から古典的教養が豊富にあると云ふ一つの信仰が深く作られてゐると云ふことである。しかしこれも當にならない。と云ふのは、カルヴェも指摘してゐるように、^(四八)デムーランの文章には正確な引用は殆んどなくて小器用なパラフレーズが多く、十八世紀フランス教養人に極く普通に見られる文化的素養を示すに止まつてゐるからである、その上、名文と云はれる所も案外、タキトス、マキャヴェリ、サリュストからの轉用が多く、この點、彼は剽竊家とさえ云はれてゐるぐらひなのである。

「ヴェウ・コルドリエ」による限り、デムーランは恐らく革命政治家でもなければ作家でもなく、云はば典型的な十八世紀フランス人のイメージを多分に湛えた人であつた。適當なピカルディ・パリ風の諷刺。^(四九)器用な古代人からの比喩。リリカルなスタイル。高貴な格調。吾々が描くデムーランのイメージは全くジャーナリストになつて仕舞うのである。

なお、アンリー・カルヴェは「ヴェウ・コルドリエ」について、文章上、一つの疑點があると云つてゐるが、それは「ヴェウ・コルドリエ」の成功の原因にも失敗の原因になつてゐる曖昧さ^{エキボック}と云ふことである。^(五〇)しかし、この曖昧さは

文章上のみに限られてゐることではない。それはダントン派―デムーランを通ずる―のエベール攻撃にもまつゐることゝ思はれるので、こゝでは暫く伏せてゐた點に關して若干の疑問を提起して見ることにしよう。

兩派の表立つた論争は別として、それは何故、デムーランがあのように執拗とまで思はれる攻撃を加えたかと云ふことである。云ひ換えればその攻撃の重點はブーショット大佐に置かれてゐるが、デムーランが意識はしてゐるが表立つて觸れてはならない或ひ觸れ得ない問題が背後にあるのではないか。その問題の一端が補助金問題に現はれてゐるのではないかと云ふ素朴な疑問である。

この疑問に對する回答は勿論早急には出來ない。こゝで吾々は「ヴェウ・コルドリエ」を中心にして兩派の争ひが革命史家に如何に描かれてゐるかを回顧し、その中から出來得るならばこの回答に對する鍵を見つけてみたいと思ふ。

本 論 (一)

(一)

アルフォンス・オーラルのフランス革命政治史 (A. Aulard, Histoire politique de la Révolution Française.

Paris, 1901) によると、^(五二)「この兩派の争ひは恐嚇政治の運用方法の相異から發したもので、その目的は共に窮局的に

はロベスピエール派政府の打倒にあつた。其れ故、ロベスピエール派第二次公安委員會にとつては兩派は共に闘ふべき黨派であつた。兩派の主張は軍事的な勝利の國內政治への利用の仕方如何に關つて居り、溫和派は恐嚇政治の緩和を過激派は反革命分子の打倒にそれを利用しようとした點にとゞまる。

九三年十二月は、この兩派の反目がもつとも鋭く現はれた段階であるが、具體的な政策上のプログラムを伴つてゐた譯ではない。エベール派は比較的にコミュニヌとコルドリエ・クラブを中心に團結してゐたのに對し、ダントン派の中のフィリップオとデムーランはダントンと異り、凡ゆる問題で第二次公安委員會に組織的に反抗してゐた。他方、公安委員會も國內政策では必ずしも意見の一致を見てゐた譯ではない。

コロ・デルボアとビヨ・ヴァレンヌは強力な恐嚇政治の推進を求めてゐたが、他の者はダントン派乃至はエベール派に或る程度同調する態度を保ちながらも明確な政策上の理念を缺いてゐた。この不明確な立場にあるものゝ大部分はダントン派と同様、軍事的勝利に乗じて恐嚇政治の緩和を行ふ考へに立つて居り、ロベスピエールもそれには反對しなかつた。彼はフランス人がより以上の自由を與える政府を欲してゐることを知つてゐたが、緩和政策を行ふ場合には自分を先頭とする最高存在を中心とした政教共同體の利益になるようにそれを利用しようとしたのである。

このためには、先づ非クリスト教運動の強力な推進者であるエベールを倒す必要があつた。當時、カミュー・デムーランはロベスピエールに與し、その新聞「ヴェウ・コルドリエ」はエベールとショメットを猛烈に攻撃してゐたが、ロベスピエールのデムーランに對する處遇は案外冷淡であつた。デムーランの「ヴェウ・コルドリエ」第三號はこれに對して恐嚇政治の數多の弊害を訴え、反革命派に時ならぬ希望を與えるに至つた。十二月二十日には逮捕者の家族による釋放運動が勃發し、このため投獄された者の釋放手段を考慮すべき調査委員會が設置された。この委員會は「ヴェウ・コルドリエ」の要求してゐる緩和委員會の設立までの臨時的な制度であるが、この緩和政策を求める動きはツーロン奪還のニュースによつて更に促進された。

特にその動きはロベスピエールに強く感じられ、ダントン一派の政權剝奪の機會が早くきたように思はれた。彼らは

國民公會に調査委員會の設立を命ずる正式の法令公布を要求したが、デムーランはジャコバンを追はれ、ファール・デグランティエヌはインド會社の問題で逮捕され實現を見なかつた。」

オーラールによれば、兩派の相異は恐嚇政治の運用方法のみに求められ、兩派は共に具體的な革命政治のプログラムで争つたものではなく、本質的には黨派の権力争いであつたことが示唆されてゐるのである。緩和政策の實施についてはロベスピエールも基本的には反對ではなかつたが、その「最高存在」を促進するのにその利用を彼は重視したと云ふのであるが、本質的には、ダントン派の緩和政策の實施とは相當の隔りがあると述べてゐるのである。^(五二)

デムーランの「ヴェウ・コルドリエ」第三號の評價は存外大きく、反ロベスピエール戰線結成の端緒になつたと考えてゐるようであるが、「ヴェウ・コルドリエ」の爾余の號についての記述は見當らない。

オーラールの分析は結局、兩派の争ひをジャコバン内部の單なる権力争ひに歸結し、その争ひを將來してゐる事情としては恐嚇政治の運用方法上の相異のみしかあげて居らず、如何なる社會的、經濟的利害關係が關聯してゐるかについては全く沈黙してゐるのである。オーラールの、この分析は單なる政情分析としては優れてはゐても、要するに古典的な權力關係の分析に止まつてゐるものと云えよう。

(二)

オーラールについて、吾々はアルベール・マティエのフランス革命史 (A. Mathiez, La Révolution Française. Tome III. Paris, 1930) を見なければならぬ。マティエは先づ、溫和派の攻撃が始まるまでは革命政府に對する反抗は散發的であつたとし、^(五三) 次いで、溫和派を次のように説明する。

「ジャック・ルー、エベール等の反對に比較して、溫和派の攻撃はより恐るべきものであつた。彼等は政府の諸々の

委員會、地方派遣委員等の實務に明るく、何れも辨説の才能があつた。彼等は恐嚇政治に脅かされてゐた人々に訴え、その結果、大規模な部隊^{レジオン}の編成に成功した。その頭領としてはダントンを戴き、ダントンは早くから恐嚇政治の緩和を主張してゐた。ダントンは又、金融業出身の議員を擁護し……有産者は再び息を吹き返した。反動の波は強力に高まり、溫和派はジャコバンを支配するため大きな努力を傾けた。溫和派は從來一つの新聞（ルギフ Rougyt）しか持つてゐなかつたが、カミュー・デムーランは新しく『ヴェウ・コルドリエ』を發行した。これは元々、自己辨護のみを目的とした新聞で、その戦術は單純であつた。溫和派の攻撃は一段と激しさを加え、殊にエベール派に對する攻撃にはより以上の努力を傾けた。『ヴェウ・コルドリエ』二號の非クリスト教運動に對する激しい攻撃に續き、同派の公安委員會と國民公會に對する刷新の要求が波狀的に行はれた。しかし、同派はたとえその要求が通つたにしても、ロベスピエール支持の態度は變えようとはしなかつた。

第三號の發行以後、事態は全く變つた。三號はロベスピエールの目を開かせ、デムーランの目標がエベールではなく、革命政府の改革にあることが明らかになつた。デムーランは共和國と王制の比較に名を借りて攻撃したが、その手口は別に目新しくはなかつた。それは十八世紀の百科全書學派の方法と全く同じであつた。しかし、三號の反響は豫想外に大きく、反革命派と舊貴族に希望を抱かせるには充分であつた。當初、過激派を倒すのに好都合であると考えたロベスピエールは溫和派の闘ひに同情的であつたが、それが個人攻撃に終始する一方、反動を準備し、ブーショットを攻撃するに至つてそれを信用しなくなつた。

ロベスピエールは革命の利益以外には何も考えてゐなかつた。彼は三號に答える意味に於ても又、革命の利益を計る意味に於ても、革命政府の明確な理念を明らかにする必要を感じた。これを契機として溫和派の退却が始まり、彼らの

恐嚇政治を阻止する試みは失敗に終つた。そのみならず彼等は全面的な危機的狀態に追ひ込まれるに至つた。彼らは反革命派に對しても緩和政策を訴えるに至つたが、これは緩和政策に對する信用を全く失はせてしまつた。溫和派はそれにもかゝらず、國會の相當數の議員のひそやかな支持を得てゐた。しかし、彼らはサン・キュロットの支持がない限り行動には出られなかつたし、巨大な政府機構を動かすことも出来なかつた。溫和派の鬭争はパリのジャコバンと、國民公會に限られてゐる所が全フランスの至る所で續けられてゐた。溫和派^{セントラ}と過激派^{ウルトラ}の争は革命政府のレジームを脅かす程に激烈化するに至つた。

戦争からの影響を免れさせるため、公安委員會は溫和派とは遙かに離れた社會政策の實施を餘儀なくされた。平和恢復に至るまでの過渡的な臨時の手段として本來その創設者に考えられてゐた「恐嚇」は、サン・ジュストによつて民主的共和國の樹立に不可缺の條件として積極的に考え直されるに至つた。恐嚇の、より以上の前進は考えられるにしても、後退は共和國の死滅を意味してゐた。二ヶ月以來、ウルトラとシトラの間にその道を探してゐた公安委員會は今や決定的にその立場を得たように思はれた。

彼等はウルトラの側につき、さらにそれを追ひ越してしまつた。サン・ジュストは全力をあげてシトラに向つた。彼の方法——社會主義的プログラム——はエベール派の息吹きから明らかに離れてゐたのである。」

マティエの分析に従ふと、溫和派はダントン派のみではなく、多くの黨派よりなる大規模な黨派として把握され、その公安委員會に對する影響力は壓倒的に大きいものであつたと云ふのである。又、デムーランの「ヴェウ・コルドリエ」も少くとも第三號は反革命派の連合戰線結成の契機としてオーラール以上に評價されてゐるのである。

マティエは更に、シトラとウルトラの戦は廣く全フランス的規模に於て把握すべきであり、それは又恐嚇政治の前進にも大きな機縁となつたと述べてゐるが、こゝに注意すべきは、シトラが明瞭に有産者層の利益を代表し、公安委員會はサン・キュロットとの妥協に於てのみ存立を計ることが出来たとしてゐる點である。

更にマティエはウルトラがこれに對してサン・キュロットの現實的要求をやゝ飛躍したプログラムを持つており、權力争ひの概念を脱却して革命に利益を求める者の、求め方の相異から争ひが起つたと述べてゐるのである。この考え方は革命派の中に社會的、經濟的カテゴリーの違つてゐる者が同居してゐることを明示してゐると共に階級間の闘争の一形態としての兩派の争ひがあつたことを示すものと云えよう。恐らく吾々はマティエによつて革命階級内部の階層的闘争の具體的例證をも得たと云ふことが出来る。しかしマティエが如何なる程度に於て又如何にして階級闘争の評価をしてゐるかについては、充分理解し得ない所も残つてゐるのである。これについての批評としてはダニエル・ゲランのそれが吾々の記憶に尙新しい所である。

(三)

次ぎにジョルジュ・ルフェーヴル教授の所説^(五四)を検討してみたい。

「非クリスト教運動に對する彈壓は過激派に混亂をもたらしした。ロベスピエールの暗黙の支持を得たダントンの友人達は過激派に攻撃を加え、デムーランは『ヴェウ・コルドリエ』を發行して驚くべき成功を得た。その第三號は嫌疑者法を攻撃し、ロベスピエールは調査委員會を設けるのを餘儀なくされた。これらの攻撃の裏には、ブーショット大佐に對する攻撃が秘められてゐたのである。

これに續いて、エベール派の要人への攻撃と公安委員會の更迭の要求が現はれた。ロベスピエールは溫和派と通謀し

てゐるように思はれ、委員會の統一保持を斷念したように思はれた。溫和派にとつては委員會が一度分裂すれば、その刷新は極めて容易に行はれ、ダントンの復活は可能性が強いように思はれた。ダントンは軍事情勢の緩和によつて恐嚇の必要は薄らいだと考えてゐたが、これは外國との平和を前提としてゐるものであつた。コペンハーゲンでその豫備交渉がされてゐると云ふ噂が高かつた。

不幸にも、緩和を要求してゐる人々の中には革命裁判所の廢止を求めてゐる者があり、又ウルトラの場合と同じく、溫和派を外人陰謀のセクシヨンの中に入れようとする動きがあつた。コロ・デルボアがリオンから引き上げてきてから、公安委員會の立場は明らかに強硬になつた。調査委員會は廢止され、『ヴェウ・コルドリエ』はジャコバンで非難と攻撃を受けた。^(五五)ロスベピエールはデムーランを始め『^{アフアン・テリブル}恐べき子供』として扱つてゐたが、今や『ヴェウ・コルドリエ』の廢刊を命ずるに至つた。ウルトラとシトラの戦は地方でも益々激化し、ウルトラは政府との戦ひでサン・キュロットに不信の念を投げられる原因を作つた。

九三年冬の食糧危機はウルトラの立場を強め、屢々、ウルトラのサンキュロット救済案に政府は妥協しなければならなかつた。この妥協の結果、ウルトラはより過激なプランの實行を迫つたが、妥協には限度があつた。政府打倒の陰謀に先立つて公安委員會はウルトラを外人陰謀の通謀者として捕え、つゞいて溫和派に立ち向つた。エベールの逮捕によつて民衆運動はより以上の前進を阻まれたが、これは革命に於る逆行の第一歩であつた。」

ルフェーヴル教授の所論はマティエのと殆んど異なる所はない。兩者は共に革命的危機を將來したものとして溫和派と過激派の動きを指摘し、兩派はそれぞれ軍事上の勝利と食糧の危機を利用して政府打倒を計つたと云ふのである。たゞ、ル

フエーヴル教授の場合、やゝ目立つたことは、緩和政策が反革命を促進した意義よりも、エペール派の要求拒否によつて革命の社會化が阻止された意義を積極的に評價してゐることである。このことは、換言すれば、サン・キュロットとの連携を拒否した公安委員會が或る程度その存在理由を自ら承認したことを云つてゐることであり、この限りに於いては、ルフェーヴル教授はマティエよりは溫和派を重要視してゐないことゝなるう。

何れにせよルフェーヴル教授の考え方は、サン・キュロットを中心にして公安委員會、シトラ及びウルトラの三者の動きを捕えようとするもので、社會の階層的構造に更に深く觸れようとするものと云えるのである。又單に、事態の推移のみに史的説明を求めるものと教授のそれには相當の違ひがあり、更により柔軟な説明が加つてゐると考えるべきであらう。

この他、注意すべきことは、シトラの隠れた攻撃目標がブーシヨット大佐^(五六)にあつたと云ふことである。マティエもシトラがブーシヨットの攻撃を開始するに至つてロベスピエールはシトラの支持を斷念したと云つてゐるのであるが、この兩者の指摘するブーシヨット大佐の動きが、デムーランを含めた溫和派の動向に大きな影響を持つてゐたのは明らかである。但し、兩者共、如何なる理由で攻撃したかについては全く觸れて居らず、何故、陸軍長官ブーシヨット個人に攻撃が向けられたかについても沈黙してゐるのである。

(四)

オーラール、マティエ、ルフェーヴルの史學史的紹介を終つて直ちに氣づくことは、三者は共に本質的には事態説に依據しつゝ、若干の評価の差を與えてシトラとウルトラの争ひを説明してゐると云ふことである。デムーランの評価にしても「ヴェウ・コルドリエ」第三號の影響が大きかつたことを認め、ダントン派の代辨者として果した意義を指摘す

るのを忘れてゐない。又デムーランが非クリスト教運動への弾壓に乗じてエペール派攻撃に乗り出したこと及びロベスピエールの支持を少くとも當初の間は受け、亦それを求めようとした態度をとつてゐたと云ふことについても三者は同様に變る所がない。

更にデムーランがロベスピエールの支持を失ひ、ダントン派全體が攻撃される端緒を作つた原因についても同様にその緩和政策の危険性を説いてゐるのである。尙オーラールは別としてマティエ、ルフェーヴルの、ブーショット大佐への攻撃がダントン派と政府との結びつきに重大な影響を與えてゐると云ふ所説に於ても三者の明白な一致點を見出すことが出来るのである。

三者を通じてやゝ相異があると思はれるのは、公安委員會、シトラ、ウルトラ三派の反目、抗爭の原因の説明をする場合であつて、それを史的な事態の推移のみに求めるのと經濟的利益の求め方の相異にその原因を求める仕方^(五七)に於ては相當の違いがあると云えよう。

この三者の史學史的考察を通じて最後に吾々が考えてみたいのは、一體、シトラとウルトラは果してそれぞれ有産者層とプロレタリアート層の正しい利益の代表者であるか^(五七)どうかと云ふことである。もしも正しい利益の代表者であると云ふのであれば、マティエ、ルフェーヴルの述べるように、シトラとウルトラの争ひは革命階級内の階層的な利益を主張し合つてゐたと云ふ意味に於ては、一種の――萌芽的形態であるが――階級闘争であり、オーラールの云ふような單なる權力争ではなくなるのである。しかし、こゝで考えなければならないことは、その利益を求める仕方が違ひ革命に對する理想が異つてゐても、それが直ちに有産者層とプロレタリアート層の利益に對する正しい奉仕者にはならないと云ふことである。この場合に於るシトラとウルトラは或ひは本質的にはマティエ、ルフェーヴルが云つてゐるようにそれぞ

れの利益集團の代表的傾向を持つてゐたかも知れないし、政策的なプログラムに於てもその利益集團に極めて近いものを持つてゐたかも知れない。しかし、假に正しい利益の奉仕者であり、利益集團の意向を完全に反映してゐる政策的なプログラムを持つてゐたとしても、その現實に於ける施行或いは行動は單にそのプログラムや利益集團の意向を利用し或ひは借りものゝ如く利用してゐる場合もあり得ることである。この場合もあり得るとすれば、シトラとウルトラの闘争は正しい意味に於る階級闘争とは云えないし、又マティエ、ルフェーヴルのこの面からのアプローチによる兩派の闘争の把握の仕方はいさゝか早まつたまた公式主義的な見方になる譯である。

議論を始めに戻して、次ぎに、兩派は正しい利益の代表者ではないと考えた場合はどうであらうか。この場合に於ては、當然、オーラル流の權力機構内に於ける單なる權力争ひが事實により近い説明になり、少くともマティエ流の階級史觀の説明では納得がいかなくなる譯である。處で、利益の正しい代表者ではない場合でも、正しい利益の代表者の如く振舞つてゐる場合もあり、この場合では、利益の正しい代表者が現實に於て利益集團の意向を單に利用してゐることは區別がつかないのである。

何れにしても、現實の利益集團の意向とその現實に於ける生かされ方は別問題であり、まして、シトラとウルトラが正しい利益集團の代表者であつたとしても現實に於るその利益の生かされ方が直ちにその意向に沿つたものであると云ふことは一概には斷定出来ない。このことは、サン・キュロットがウルトラに不信の念を投げつけてゐたと云ふ事實によつても既に或る程度、立證される所であらう。

この正しい利益の奉仕者であつたかどうかと云ふ議論は既述したように、押し進めてゆけば、相互に交錯してくる部分も出てくる譯であり、これを史實の實證に於て追究するのは實際には極めて困難である。シトラが有産者層の利益代

表者で、ウルトラがプロレタリアート層の利益代表者であつたとしても、それも政黨の動きとしては基本的にはさうゆう傾向がある時期にはあつたと云ふだけで、必ずしも常に凡ゆる場合にさうであつたとは云えない筈である。

シトラとウルトラの場合を考えると、特に問題なのは民衆の利益を掲げてゐるウルトラが果して常にプロレタリアート層の利益に合致した行動に出てゐたかどうかと云ふことであらう。それ故ウルトラの判断には相當の慎重さと嚴密さが求められるのは當然のことゝ云はなければならない。

以上の考察によつて吾々はエベール派をもつて直ちに常に民衆の利益に沿つて行動してゐるものとは見なされ得ない所以を指摘してきたが、次ぎに考えて見たいのは「ヴェウ・コルドリエ」の史料の検討から割り出されたデムーランのブーショット攻撃の問題である。デムーランのブーショット攻撃にはエベール派への攻撃と表裏一帯をなしてゐるもので、何かの問題を通じて両者が結びついてゐるのは間違ひない。何れにせよ、吾々の課題がエベール派の實態究明とブーショット大佐に向けられた攻撃の眞意の究明に絞られてきたのは確かである。

本 論 (三)

⇒

さて、「ヴェウ・コルドリエ」に於てブーショット大佐が問題になつて出てくるのは第三號と第五號とであるが、この中彼に關する材料として引き合ひに出されてくるのはエベール派の新聞補助金問題だけであり、^(五八)他には特にあげるべきものは見當らないのである。従つて吾々はブーショット大佐が何故攻撃の対象になつてゐるか云ふ問題を考える場合

の材料としては他にマティエ、ルフェーヴルの斷片的な記事しかないのであるが、これだけでは課題の究明は到底期し難たい。現在の所、吾々に出来ることは、若干の事實と現象を見つめてその意味を汲みとる程度の作業に終つてしまふのであるが、それでもブーショット(五九)を問題として考えさせる幾つかのポイントを與えてくれるのである。

ブーショットに攻撃が向けられてゐる事實に關して注意すべきことは、この攻撃の性格乃至は度合を示す若干の材料があることである。これは「ヴェウ・コルドリエ」から考え得られる材料なのであるが、勿論ブーショットが攻撃されなければならぬ必然性の説明には足るものではない。その一は、ブーショットに對する攻撃が猛烈を極めてゐると云ふことである。「ヴェウ・コルドリエ」を見ても分る通り、彼の攻撃方法は他の場合では斯様な形をとらず、彼の好んで使つた比喩的方法が多いのである。従つて一人のエベール派に對する攻撃方法としては確かに納得のいかない方法と云えるのではあるまいか。

次ぎに指摘したいのは、その攻撃の狙ひが「ペール・デュシェーナ」紙に與えられた補助金にあることである。激烈な政爭が行はれてゐる最中に於て、一定の傾向の強い新聞のみに補助金が與えられ、これに攻撃が向けられてゐるのは一体如何なることであらう。

更にあげたいことは、他の行政長官と地方派遣委員の中で當然、辭職を求められてもいゝと思はれる者が多數ゐるにもかゝらず、何故陸軍長官の地位にゐるブーショットのみが罷免を求められてゐるのかと云ふことである。

以上のことから分ることは、要するに攻撃の狙ひがブーショットが陸軍長官の職にゐることゝその地位に於て一つの新聞紙に補助金を與えてゐることとであり、更にそれなるが故に特に攻撃が強かつたことが想像されてくるのである。更に云えば、地位と權限の問題に集約されるであらうが、この場合勿論、早急に兩者の間に直接的な必然的な關係があ

つたと云ふのは慎しむべきである。何故ならば、この場合に於るその云ふ所の地位に於ける権限の問題は、より廣い問題の一端が偶々斯様な形で現はれてゐるかも知れないからである。

この攻撃に關する二、三の問題からは確かに攻撃されるに足る何か重要なことが伏在してゐるのを推定させるのであるが、ブーショットが何故攻撃されたのかと云ふ課題の究明には程遠いものである。たゞ、現在云えることは、ブーショット自身がブーショットの週邊にダントン派とは相容れない利害關係の中に置かれてゐるのではないかと云ふことである。斯様に考えるのが許されるところならば、吾々は當然、ダントン、エベール兩派の争も相容れない利害關係が原因になつてゐるものと思ふ他はない。

さて、こゝで改めて考えて見たいと思ふのは、利害關係を共通にしてゐると思はれる兩派が對立してゐるのには、兩派に全く異つた固有の原理と理想があるからであらうが、果して兩派に明瞭に喰ひ違つた原理と行動形態があるかどうかと云ふことである。この點に關しては、從來行つてきた史學史的檢討の成果による限り、吾々は必ずしも明確な斷定を與えられた譯ではなかつた。

ダントン派について知り得たことは有產者層の意向に近い恐嚇政治の自由主義的運營を求めて動いてゐたと云ふことに盡きて居り、エベール派については同派に於る恐嚇政治の運用方法により社會的な配慮が加えられ、その社會的支持者としてプロレタリアート層を持つてゐたと云ふ程度のことにと止つてゐるのであるが、これに關してより明快な斷定を下してゐるのはダニエル・グランである。グランは兩派は共に明瞭な階級的利益の代辨者で、それぞれの利益集團と密着してゐたと云ふのであるが、兩派に固有の政治原理があつたとは云つてゐないのである。

この點について、更に明快な判斷を下してゐるのは恐らくブーシェとルウの議會史であらう。

このブーシェとルウの史料集は史料の提示以外に屢々、主觀的判斷を挿入してゐるので、相當扱ひには慎重を要するのであるが、それでもこの問題の究明には極めて貴重な示唆を與えてくれてゐるのである。

ブーシェとルウの説明によると「革命派の中でもつとも急進的であつた『アンラージェ』は九月十六日限りで革命史の凡ゆる公式の記録からその名を消してしまつた。^(六〇)それは指導者のジャック・ルウとルクレルク Leclerc が逮捕され、統一的行動が困難になつたからである。残つた同派の者はコルドリエ・クラブのショーメット、エベール、ヴァンサン、モモロ等に接近し、こゝにエベール派の母胎が出來上つた。^(六一)しかし『アンラージェ』に屬してゐたものは案外、民衆生活の安定や生活資料の供給には關心を持たず、^(六二)その行動は直接的であり、これに反してコルドリエ・クラブの目的と手段には常に民衆の生活が念頭に置かれてゐた。従つてエベール派の行動はいつも二元的であり、その戰術には一貫したものになかつた。

エベール派はその後クロツ Cloots コック Kock 等の加盟を得てやゝまとまりを見せ、主としてヴァンサン Vincent ショーメット、エベールが指導に當つた。彼等がもつとも強力な動きに出て世人を驚かしたのは、非クリスト教運動の推進と『理性の祭壇』の促進であるが、眞實はそうではなかつた。^(六三)この運動は政治的陰謀のための手段であり、陰謀を實現するためにこの運動を進めたのに過ぎない。彼等はこの運動の成功に自信を得て國民公會の解散を要求し、十一月七日にはクーデターを準備するに至つた。

ダントン派もエベール派と同様、個人の利益によつて形成されてゐた黨派で、これにはシャボオ、ジュリアン・トゥールーズ、ドローネ・ダンジェル、バジール、ダントン、ファールブル・デ克蘭ティヌ、デムーラン等が加つてゐた。

カミーユ・デムーランはダントンは異りロベスピエールの支持を或る程度受けてゐた。彼の信念のない無節操な言行は人によく知られてゐる所である。彼の政治的タクティックスは單純で、恐怖制度の恐しさを誇張して宣傳する方法とフィリップの書いたものを盗用する程度のものであつたが、それでも溫和派に多くの人を惹きつけるだけの力を持つてゐた。

エベール派の政府攻撃の方法は、國家的な存立を根本から脅かすような條件を政府に強ひる方法であつた。彼等は社會的なアナルシを惹き起すことによつて革命戰爭を終らせようとしたが、溫和派は恐嚇に脅かされてゐる凡ゆる人々に呼びかけて反革命的氣運を醸成し、それによつて戰爭の妥結を促進しようとした。この兩派の方法は現實には外國の利益に奉仕することであり、外人の陰謀とは異なる所はない。従つて、兩派は外國の利益を計る黨派であることに違ひないのである」^(六四)と述べられて居り、吾々に大要次の如き判斷を許すのである。

先づ、吾々が得られる基本的な判斷は兩派が共に個人的利益を念頭に置く黨派で、確たる固有の政治理想を持つてはゐないと云ふことである。従つて兩派の基本的な政策上の相違はあり得ないし、又政策による區別は難しいことになる。區別があるのは、戰術上の相異に過ぎない。又、外國の利益を窮局的には助ける結果を伴ふ手段を行使する點に於ても兩派は本質的には同じである。強いて兩派の違ひを指摘すれば、權力の掌握方法として社會的混亂をとるか反革命に訴えるかの方法的差異に過ぎず、これにしてもどの程度その支持者の利益に忠實であるかどうかは疑問である。

斯様に考えてみると、ダントンは云ふまでもなくエベール派にも固有の政治的プログラムがあつたとは思はれない。従つてエベール派も吾々が從來想定してゐたのとは違つて、單なる個人的な利益を計る黨派に過ぎないと云ふことになるのである。

たゞ、こゝで一つ疑問として残ることは、革命を幟装してゐた單なる利益的な黨派が何故強力な動きをなし得てゐたかと云ふことであろう。これには、彼等が八月十日並びに五月三十一日兩革命でパリの自治的權力を掌握し、その自治的權力を通じて他のフラクションよりは民衆生活に觸れ得てゐたこと及びその限りに於てはサン・キュロットと提携し得る余地があつたことを指摘すれば充分である。たゞし、この場合、注意すべきことは、サン・キュロットは必ずしもパリ・コムミューヌを代表してゐるものではないと云ふことである。^(六五)ダニエル・ゲランはパリ・コムミューヌをもつてブルジョア革命に對し民衆の生活を守る階級的黨派であるとしてゐるのであるが、事實はさうではなく、パリ・コムミューヌはモデルと云はれる反サン・キュロット分子を多く抱いて居り、この兩派の政治的、社會的意向には屢々相異してゐる面が見られるのである。従つてコムミューヌが少くとも民衆の利益の統一的な連帶的な擁護の機能を持つてゐたとは云えないのである。^(六六)

それ故エベール派の強味は、パリ・コムミューヌの民衆に根差してゐた點にあるとは云えず、寧ろ、自治體の持つ自治的機能を高度に活用することによつて中央政府の直接的な管理を免れてゐた點にあつた。

エベール派について次ぎに究明すべきことはロベスピエール派との關係である。本來、兩派の結びつきは社會政策を打ち出し民衆生活の擁護を唱える限りに於ては友好的であつたが、非クリスト教運動の段階に入つて明らかに變つた様相を呈してゐた。^(六七) ついで、この兩派の動きに決定的影響を與えたのは十二月四日の國家權力の獨裁的な集中化を決めた法令であるが、^(六七)パリを始め自治體の機能はこれによつて大幅に奪はれ、特にエベール派は事實上の活動根據地を奪はれることになつた。エベール派が決定的にロベスピエールに踏み切る契機は従つて反クリスト教運動に對する彈壓ではなく、むしろこの十二月四日令であつたと云ふことが出來よう。

エペール派の検討に關し、本來、吾々が求めたものはダントン派との反目、抗爭の原因であつたが、以上の立證だけでは勿論十分ではない。これには、どうしてもエペール派とブーショットの關係が明白にされる必要が生じてくるのである。

(四)

こゝで再びブーショット將軍の問題に立ち歸ることゝしよう。吾々は今までブーショットがダントン派の攻撃の對象になつた點について一應の假定的推測をかゝげ、それに平行してエペール派の實態を把握するのに努めてきたが、ブーショットの名前はエペール派の形成過程には一つとして見當らないのである。

この限りに於ては、ブーショットは本來のエペール派でないことが推定出来るし、又その活動に積極的に參畫した形跡も認められないのである。^(六八)従つて、ダントン派に攻撃される材料もこの中から拾い出すことも出来ない。そうだとするならば、ブーショットが問題になるのは、結局、エペール派の新聞に補助金を出した事實以外にはないのである。一體この事件の眞相は如何なるものであつたのであろうか。

「ペール・デュシェーヌ」に關する事件に關してヴーシェとルウならびにエルロオ Herlaut は『ヴェウ・コルドリエ』にかゝげられたブーショット中傷記事を調査するため設けられた委員會は、一月五日に先ずコロ・デルボア、ブルドン・ドアーズに國民公會で報告を行はせた。彼らはその報告でブーショットが國庫より十二萬リーヴルの補助金を『ペール・デュシェーヌ』に交付したが、以後、公金交付は必ず臨時行政委員會の承諾を得ることにし、ダントンの發議によつてそれは國會の承諾を得たのである^(六九)とした後、ブルドンの狙いが單に公金交付の手續きにあるのではなく、彼の云いたかつたのは「ブーショットが委員會の許可を受けず勝手にその權限で軍事費を流用したと云ふことであ

つた」とし、更にこれが全面的誤りであつたとして次のように述べてゐるのである。

「ティエール A. Thiers は『その革命史(Histoire de la Révolution)の第六卷百二十三頁以下に於てブーショットに對する『ヴェウ・コルドリエ』の非難に満ちた記事を引用し、特にブーショットが軍事費から二萬リーヴルをエベールに與えた第五號の記事を事實として認めてゐるが、ブーショットから送られたマニスクリプトはそれを全面的に否認してゐるのである。ティエールはその後もこの誤りを認めようとはしてゐない。

ブーショットのマニスクリプトによれば、彼は新聞や黨派の議論に應えたことはないし、その暇もない。彼はデムーランが外相ダントンの秘書官であり、パレ・ロワイヤルの革命指導者とは信じられないと云つてゐるし、少しでも當時の行政機構を知つてゐる人ならば新聞購入に軍事費を流用出来ないぐらいのことは充分知つてゐる筈だと云つてゐる。デムーランは彼を『ペール・デュシェーナ』の編輯に關與させ、その上彼にジャーナリストがモデルの側につくように強壓を加えたが、彼はそれに従はなかつたとはつきり述べてゐる。又ブーショットは軍事情報を與えたことはないし、新聞とパンフレットの編集に加つたこともないと云つてゐる。デムーランは更に『ペール・デュシェーナ』に一萬六千リーヴルしか與えないと言つてゐるが、正規の割當は十萬を越えてゐるし殊更少くしたこともない。ましてエベールに金を與えた事實などは全くないと云つてゐるのである」。

このブーシェとルウの記述によれば、デムーランの中傷は全く事實無根であり、又「ヴェウ・コルドリエ」に動かされてブーショット攻撃を行つたブルドンの演説も見當はずれになるのである。

ブーショットの新聞補助金交付はブーシェとルウの記述をまつまでもなく實は全く正當な手續によるものであり、デムーランとブルドンの攻撃は全面的に否定されなければならないのである。

と云ふのは、ブーショットも指摘してゐるように、九三年四月十六日の「國民公會^(七二)は革命の所業の前進を促がすため臨時行政委員會に六百萬リーヴルの使用を認め」、更に六月には百萬リーヴルの追加を行つた上、新聞購入用としてその中、百二十萬リーヴルの使用を陸軍長官に認めてゐるからである。

この後、五月二十二日と七月二日の政令は、新聞購入費として五萬リーヴルを、さらに緊急食糧購入と戦死者および傷病者手當ならびに外交機密費として百萬リーヴルを割り當てゝ居り、ブーショットはブーシエの報告通り割り當てられた大部分を新聞購入に充當し、「ペール・デュシェーヌ」には十萬四千リーヴルを充當してゐるのである。

「ペール・デュシェーヌ」紙をめぐる問題はかくて完全にデムーラン側の中傷であることが分るが、ブーショットに對する非難、中傷はこれだけでは終つてゐないのである。^(七二)

この一連の反ブーショットの動きの中で特に注目をひくのは、九四年一月二十八日にブールドン・ド・アーズが行つた報告である。

ブーシエとルウはこれに關して次の如く^(七三)「十二月十三日に、マインツ占領後同地に駐留してゐた軍事委員は人質として留置されてゐた一千人の同胞をひきとるため、同地に送られるべき經費がなまだ着いてゐない旨を國民公會に訴えてきた。これに對してブールドン・ド・アーズはその責任を陸軍委員會とブーショットに歸し、その罷免を要求するに至つた。ブーショットはこの件について進んで國會に報告する用意があると答え、次の如き陳述を行つた。國庫に對し、硬貨で六十一萬六千リーヴルをマインツに送金するのを命じたが、十一月（ブリウメール・二十五日）、それが未着であるのが分つたのでライン・モーゼル軍團付委員サン・ジュストとルバ Lebas に送金不能になつてゐる事情を改めるように書き送つた。この障害は實はフランスの軍隊指揮官と敵國との通謀を絶とうとしてゐる軍團付委員から發してゐる

るのである。

同様に同じ目的で書き送つたライン軍團支拂總監はその送金の許可を求める請願を國民公會委員におこなつた……この送金を命令し且送金の促進を命じたのは八月三十一日のことである。經理擔當士官の任用は現地部隊によるもので、陸軍長官と陸軍委員會の管轄下にはない」と述べてゐるのであるが、ブーシェによれば、マインツの眞相は要するに軍隊指揮官と外國との通謀阻止のためにとつたサン・ジュストの措置にやゝ分るのであるが、この場合に於てもブーショットに責任がある譯ではない。

(三)

斯様にみてくると、ブーショットに對する執拗な攻撃は、結局ブーショットが陸軍長官の職にありながらエベールと何かの結びつきがあつたか、それともエベール派と事實上同じ動きをしてゐたかと云ふ點を問題にしてゐると云ふ他はない。果して彼はエベール派であつたであらうか。又エベール派を操縱するだけの何かを持つてゐたのであらうか。

ブーショットの精細な研究を發表したエルロオによれば、^(七四)彼は革命精神に満ちた公安委員會の忠實な信奉者として政府にもジャコバンにも極めて好評で、革命憲法の公布、アッシニアの軍隊使用及び軍隊と革命クラブならびに軍團付委員との協調、融和に拂つた努力は多大のものがあつたと云ふ。又軍團再編成の仕事は殆んど彼一人に負ふもので、^(七五)軍政面に果した功蹟は絶大であると述べてゐるのである。

こゝでブーショットの略歴を紹介しながら問題の焦點に迫つてゆくことゝしよう。

ジャン・パプティスト・ノエル・ブーショットは一七五四年十二月メツスに生れた。^(補註)父のパプティストは陸軍出納官で七人の子を持ち、ノエルは次男であつた。末弟のシャルルは後に騎兵大佐としてノエルと同様に軍籍に在つた人であ

る。ノエル・ブーショットは十九才でナツサオの歩兵連隊に一兵士として入隊し五年後には中尉に任ぜられ、革命勃發當時には大尉としてエステルアジ輕騎兵連隊のレテル分遣隊に勤務し、同市と部隊の治安、補給の仕事に従つた。ブーショットの公的生活はこの時から始まる。レテル分遣隊勤務中、激務のため一時病を得たが、その時、彼は教育の機會均等と僧侶財産の分割譲渡に關する意見書を國民議會に提出し、後年の民主的な革命精神の片鱗を窺はせてゐた。レテルに於る熱心な勤務とセダンの「憲法の友の會」會員としての活動は早くから國會の注目を惹いてゐたと云ふ。九二年にはリール駐在中、オーストリヤ軍との戰鬪に加つたが、その後キャンブレ駐在に變はり、ノール軍團付國民公會委員からその革命精神に満ちた活動は絶讃を博した。特にデュムーリエ將軍の逃亡後の軍隊再建には努力し、九三年四月にはビュルノンビルについて陸軍長官に推された。この、當時、一陸軍中佐に過ぎないブーショットの長官任命はアルプ軍團司令官ビロン將軍を始め多くの革命派の壓倒的支持を受けて居り、國民公會にも一人の反對者もなかつたと云ふ。恐らくデュムーリエ將軍逃亡後のノール軍團麾下のキャンブレ駐屯部隊の再建と旺盛な革命精神が評價されたものらしい。

陸軍長官としてのブーショットの仕事の主要なものは、ジロンド系の前長官ビュルノンビルの殘した反革命分子の一掃で陸軍委員會の徹底的刷新と機構の改革と軍團組織を含む軍政の全般的改造であつた。ブーショットはこの改革に當つて先づ長官付高級副官に二六才のフランソア・ニコラス・ヴァンサン *François-Nicolas Vincent* を据えたが、ヴァンサンは既に選り拔きのコルドリエ・クラブのメンバーとして多くの革命派から注目されてゐた。九月には一官房、六部四百五十三名からなる新機構が発足するに當つては、主としてヴァンサンの努力に負ふ所が極めて大きかつたと云はれてゐた。新しい陸軍委員會の最大の問題はビュルノンビル系統の反革命分子の追放であるか、そのために他には

見られないような革命精神の厳しい立證が構成員に求められ、當然、強硬な革命分子がコムミュヌ、セクションから選任された。國民公會と公安委員會ならびに人民結社の監察も從つて極めて強化されたが、反面エベール派の系統の者が多く就任したのも止むを得ないことであつた。この新陣容の中で特に注目を惹くのは、補給擔當の第二部の部長としてロンサンがあることである。

發足以來、ブーショットにとつて問題であつたのは、パリ・コムミュヌの出店の如き新しい陸軍委員會の仕事の能率が全くあがらなかつたこととノール軍團付委員から公安委員會の軍事擔當委員に戻つたラザール・カルノーとの意見の相違であつた。カルノーとの意見の相違は主として感情的のもので軍事政策の本質にかゝわるものではなかつたが、この選り拔きのエベール系パリ・コムミュヌ出身部員の非能率はブーショットは勿論、國民公會と公安委員會が解釋に困惑する位で、そのため屢次にわたり革命結社と公安委員會の監察と干涉を招いてゐたのである。この非能率は結局實務の未経験なものが多過ぎるために起つたと云え、陸軍委員會の改組が再び問題になつてゐた程であつた。

ブーショットはこの間、軍裝備、食糧、三十萬兵士徵集令、國民總員令等の困難な課題を捌き、國民公會と公安委員會の信任は益々募る一方であつたが、この間、六月、ブーショットはダントン等によつて解任され、ライン軍團司令官ボーアルネ *Beauharnais* 將軍の就任を見た。しかし、パリ・コムミュヌを始め革命結社は全てこれには反對で、特にヴァンサンは直接、公安委員會を攻撃し、地方派遣の陸軍委員も全て反對した。此の結果、ブーショットは復職したが(九月)、ダントンのゐない公安委員會は今や全て味方であり、それだけデムーランの攻撃はダントン系統の者が締出されてゐた後の委員會の非能率とブーショットの復職に激しく向けられてゐた譯である。しかし、このデムーランの攻撃は必ずしもこれらの點のみを問題にしてゐる確證にはならないのである。いづれにせよ、エルロオも述べてゐるよ

うに、^(七六)ブーショットは公安委員會に忠實なこと以外には特に指摘すべき政治的傾向を持つてゐた譯ではない。ただ、五月三十一日以降、公安委員會がエベール派の唱える徹底的抗戦に傾くと副官ヴァンサン一派に押され、エベール派の强硬政策に同調する傾向を見せたことは確かであつた。^(七七)

彼が陸軍長官として公安委員會に受け入れられてゐた主なことは、恐らく反革命の軍隊内に於る傳播を未然に防ぐと共に軍隊精神の^{モデランテイゼ}溫和化に反對したこと、出征兵士の家族に規定以上の保障を與えたためセクションに於ても人望があつたこと並びにトゥーロン軍港奪還に際して示された軍隊に對する布告が謙遜な共和的精神に溢れてゐたこと等に盡きるであらうが、^(七八)これらは要するに革命政府の原則に沿つたものに過ぎないのである。何れにせよ、ブーショットが複雑な政治的波紋から遠く隔つた領域にゐたことは確かなことと云はなければならない。

そうであるとするならば、ブーショットがエベール派と見なされた最初の機縁は何處にあつたのであらうか。それは恐らく、第二次公安委員會の成立直後、公安委員會の権限縮少を試みたダントンに副官ヴァンサンが反撃した時である。^(七九)ダントンの提案通り権限縮少が行はれれば、當然、臨時行政委員會は廢止になる譯であり、その一部局としての陸軍委員會の副官が反對してのも肯ける所であるが、ブーショットはこの時も兩者の論争には觸れてゐないのである。しかし、この時、ブーショットはヴァンサンと共に反對してゐるものとダントン派に見られ、延いてはエベール派と見なされたものと思はれる。

ヴァンサンは更に九月に入り、國民公會の地方派遣及び軍團付委員制度の廢止による軍隊の發言權擴大に乗り出したが、これは反つて國家權力の集中化の方針に反するものとしてダントン派のフアブル・デグランティヌに乗ぜられ、ヴァンサンは「赤將軍」^(八〇)ロンサンと共に十二月十七日に保安委員會に逮捕されるに至つたが、この場合に於てもブーショ

ットは何等關知する所はなかつた。

この逮捕は一應溫和派の勝利を思はせてゐたのであるが、反面エベール派の反撃も激しく、又それだけにデムーランとダントンの攻撃も激しさを加えたのである。ブーショットはしかしこの兩派の戦ひに巻き込まれるのを避けるため軍隊内部に監察委員會「ミテド・ウエリフイカシオン」(八一)を設け、エベール派と目される者を追放する手段を思い立つた位であつた。しかし、この監察制度は現實には中央部の陸軍委員會のみならず各軍團關係の地方軍事委員まで及ぶべき性質を持つてゐたのである。

ブーショットは一方、このダントン派の個人攻撃を免れるためにエベール派に頼る氣持を持つたこともあつたが、エベール派の叛亂計畫には彼の純粹な共和主義思想はついていけないものではないし、又ヴァンサン等の反革命と目されてゐた軍隊の發言權増大の企てにも従えるものではなかつた。従つて吾々がブーショットについて云えることは、公安委員會の強硬な戦争政策に忠實な限りに於てはサン・キュロット的であるが、エベールがロベスピエールに反抗する限りに於てはエベール派ではなかつたと云ふことになるのである。(八一)

結 論

以上によつてみても分る通り、ブーショットに對する非難と攻撃は、ブーショットの周邊に於る動きに對するものゝ一つの現はれであり、その攻撃に於る手段として用ひられてゐる場合ばかりである。斯様に考えてくるとこの兩派の争ひには更に別箇のアスペクトに屬する問題があるのではないかと云ふ最後の疑問が出てくるのである。

こゝで検討すべきことは、陸軍長官としてのブーショットが何を中樞的課題と考へ何を實質的に押えてゐたのかと云ふことである。彼の陸軍長官就任によつて公安委員會の軍事委員ラザール・カルノーの仕事は大半ブーショットの手

渡されたが、その中にはカルノーの十分果し得なかつた軍需補給があり、この面に於るブーショットの活躍が期待されてゐたのは事實である。ブーショットの直面した課題は、軍需補給の圓滑な遂行を行ふため従前の恐嚇的な統制制度とそれに適當な形で自由な要素を組み入れることであつたが、何れにせよ、既存の公定制度と食糧委員會に原則的には従はなければならなかつた。^(八五) たび、從來の場合と同様、軍需補給の實務は軍團付軍事委員と軍隊御用商人の手に握られて居り、彼等の自由な活動がなければ事實上軍需補給は不可能な状態にあつたのである。現地に於る補給の實務は更に軍隊御用商人に委されて居り、或る程度の自由な利潤は絶対に必要であつた。又それだけ、反面に於ては彼等の活動を監察し、^(八七) 統制する微妙で複雑な制度を擴充する必要も出てゐた譯であるが、何れにせよ、補給物資の收納、管理、支拂等は現地軍團付軍事委員の權限にあつたのは事實である。従つてこれに伴ひ、必要物資の供給、調達の權利と利益に關して常に問題が起る可能性があつた。

ブーシェとルウの、この補給から利益を得てゐると云ふ記述に關し、更に吾々は現實にエペール派の出店とも云ふべき陸軍委員會と軍團付補給委員が利益を得てゐる確證を示すことが出来るのである。その一つは十一月二日付ランス發のアルデンヌ軍團付委員ボオ Bo の公安委員會宛の報告であつて、^(八八) それによれば、「この軍隊裝備の劣惡さに就いては自分は陸軍長官の責任を問題にはするが、特にその周圍の取巻きを非難する。陸軍委員會と内務委員會を監視せよ。陸軍長官も内務長官も優れたパトリオットであるがその取り巻きが悪いのだ」と記されて居り、更にモーヴージュ地區司令官のヴェスウ Vezu も十二月二日付のブーショット宛の書簡で「貴下は、貴下に正しい情報を與えず、又自ら取引に當り、不當な利益を企業に與え補給の實務を山師のような者に委せてゐる人々にとり圍まれてゐます。……註文した一萬八千人分の靴は半分しか届きません……御承知のように共和國は巨額の費用を軍裝備にかけて居りますが、出費が多

いのにもかゝらず、補給調達が旨くゆかないとすれば補給機構が悪いと當然結論しない譯には参りません」と述べ、明かに現實に調達に當つてゐるものと陸軍委員會の擔當官が利得を得てゐる事實を示してゐるのである。

ブーショットの押さえてゐた中樞的なポイントは、かくて軍需補給を廻る軍團付委員にあつたが、問題なのは彼の目には直接觸れ得ない補給物資の利益、權利機構が存在してゐたと云ふことである。

ブーシェとルウは「ブールドン・ド・アースは革命から利益を得てゐる陸軍委員會が尙革命の維持、存續を希望してゐると非難したが、その際、彼自身は何を希んでゐたのであろうか」とその議會史に於て述べてゐるのであるが、この記事は要するに軍需補給を含めて革命から利益を得てゐたものが多數ゐることを示してゐるものではないであらうか。ダニエル・ゲランはダントン派が軍團付委員から軍需補給を通じて利益を得てゐたと述べ、エペール派のそれには何等觸れてゐないのであるが、エペール派もダントン派と同様本質的には利益を求める黨派であることは既に立證した所である。

ダントン、エペール兩派が激しく争ひ、ブーショットが猛烈な攻撃を受けたことは、要するに補給の實權を握つてゐる軍團付委員と陸軍委員會の支配機構をめぐる權力争ひが原因であつた。

「ヴェウ・コルドリエ」の史料の検討とダントン、エペール兩派の争ひに關する史學史的展望を通じて吾々の提起した課題はかくて一應の回答に達したが、「ヴェウ・コルドリエ」に於る曖昧の問題も恐らくこの回答によつて解消し得るものと思はれる。

カミーユ・デムーランもこの激しい闘ひに於ては所詮ダントン派の一代辨人に止まり、ロベスピエールの云ふ一人の「恐るべき子供」に過ぎなかつた。革命の「新しき波」は彼の革命に對する認識を遙かに越えて、打ち寄せてゐたので

ある。それは又、ロベスピエールの^{ポリティック・テカリブル}均衡政策の防波堤を崩してゐる波でもあつた。(一九六一年一月二日)。

註

- (一) Le Vieux Cordelier, édition complète et critique d'après les notes de Albert Mathiez avec une Introduction et des commentaires par Henri Calvet, (Les classiques de la Révolution Française). Paris 1936, p. 6-8. 以下、本書をV. Cと略記する。「ヴェウ・コルドリエ」の複製本は始めて出版されたデュセーヌ Dusenue 版のを加えると全部で十一に達する。従つてこのマティエ、カルヴェ本は十二番目に相當する譯である。デムーランの全集としてはシャラヴェ Charavay クラルティ Claretie 等があるが決定本と云えるものはない。
- (二) V. C. p. 8 et 33-34
この版本は元來、マティエの手によつたものであるが、カルヴェのクリティックの方が更に優れて居り、事實上、カルヴェ本と呼べよう。
- (三) A. Aulard, Histoire politique de la Révolution Française Paris 1901. p. 460-5.
ダントン派に關するオーラルの総合的な見解が窺える點で、この部分は重要である。ダントンに關する彼特有の積極的な評價は、これから得るのは困難である。
- 尙、ダントン研究には前川貞次郎教授の「ダントン研究史の問題」(「京大文學部紀要第六號、昭和三五年三月」)に詳細な案内があり、又問題の所在が史學史的に鋭く指摘されてゐる。筆者の研究はテーマの關係上、ダントン派と云ふよりも溫和派の實體を探る仕方を取り、エペール派との異同を見る限りに於て史學史的に得られた事實の究明を期した次第である。
- (四) 拙稿 Commission des Substances の食糧補給政策を廻る諸問題(史學三十ノ三) 七九頁及び八十頁参照。
- (五) Déchristianisation を指す。革命に於るキリスト教、特にガリカン教への課題は革命に伴ふフランスの近代國家、市民社會の轉換過程に於て如何なる在り方をとるか云ふことであつた。その段階は教會財産の國有化、僧侶身分の變質、理性宗教、最高存在に分けられる。非キリスト教運動はこの中、理性宗教の段階に當り、九三年十一月のノートルダム寺院に於る理性の祭典で頂點に達した。エペール派は特に反革命運動の展開とカソリック僧侶の關係に深い容疑を持ち、反革命派の一掃と云ふ觀點から

カソリック教會と僧侶の攻撃を行つた。この運動の主旨は従つてクリスト教絶滅ではなく、その市民的變容にあつた。尙、政教分離の完全な實現は、九四年九月十八日に僧職者、教會の俸給豫算を國家財政から除去する法令が出てからのことである。

(六) マティエの革命史(第三卷)一〇一頁以下によれば、會社の清算命令が出る前に株式を買ひ占め實際より損害を少く見積る偽清算書を作ることによつて價格をつり上げ利益を得ようとした事件である。

(七) 革命中に二人のディロン(Arthur Dillon et Théodore)が登場してくるが、二人とも將官で且つ親戚關係にあつた。テオドルは九二年四月三十日、敗走してゐた味方の軍隊にリールで殺された。アルテュールは九二年九月國王退位に反對して王黨派と見做されたが、後にアルプの部隊司令官になつた。ヴァルミイの砲撃後再び反革命派として免職されパリに呼び戻されたが、國民公會はこれを赦し、(九三年二月)司令官のポストを與えられまいゝ過してゐた。パレ・ロワイヤルの賭博場の常連になつてデムーランと知つたのはこの頃である。ディロンの借金が五〇萬リーヴルに達してからこゝで公安委員會の容疑を受け、(九三年六月)更にルイ十七世擁立の嫌疑さえ加つた。(V. L. p. 33-4).

(八) この補佐官任命はロベスピエール宛書簡で求められてゐる。

Correspondance de Maximilien et d'Augustin Robespierre (éditée par Georges Michon). の二四三號によるとデムーランは地方派遣委員として赴任させる法の施行を妨げる事情は特にないから補任官任命を求めると簡單に述べて居り詳しいその意圖は不明である。尙、これには日付がついてゐない。(同書二〇五頁)。

(九) この告發は、デムーランが利益を得てゐたにもかゝらず、故意に無關心を裝つてゐることに基いて行はれた。(V. C. p. 35). 實際には、ウーシャル將軍解任の際、公安委員會が猛烈に攻撃されたことがあつたが、デムーランは沈黙して何も云はなかつたので、彼がそれに關係してゐるのではないかと疑いを持たれて非難された。(V. C. p. 51).

(10) マティエによれば、外人の陰謀とはイギリス、オーストリアを中心にした偽アッシニヤの偽造による財政不安と革命派の買収による反革命の促進を云ふ。偽アッシニヤの發行は五億リーヴル(五百萬スターリング)に達したと云はれてゐる。(A. Mathiez, La Révolution Française. Tome III. p. 91-117.)

(一) V. C. p. 39.

(二) V. C. p. 40.

勿論、公安委員會からも完全に見離されたと判断したのであつた。

(三) 「ヴェウ・コルドリエ」の表題は、いづれも次の如き體載をとつてゐた。號數の下には共和曆で月日が付せられてゐる。

Le Vieux Cordelier

Journal Rédigé

par Camille Desmoulins

Député à la Convention, et Doyen

des Jacobins

Vivre libre ou Mourir

No

(四) V. C. p. 49-50.

ロベスピエールはこの時までデムーランの眞意が讀めず、警戒心を抱いてゐない。カルヴェは、兩者の將來に於る動きを見透さずにいきなり兩者の間に同盟が出来たとするのは早計に過ぎると述べてゐる。

(五) V. C. p. 10.

特に言論界のみを問題にしてゐる譯ではなく、一般の革命諸派の動向を含めてこう云つてゐる。

(六) 二號は九三年十二月五日付で發行された。分量は V. C. で五一頁より六六頁に及んでゐるが、本文でも述べてゐる如く、政治的議論は殆んどなく、未開民族の宗教を長く述べ立て、間接的にはロベスピエールの「理性の祭典」への深入りを批判してゐる。

(七) A. Aulard. Histoire politique de la R. F, p. 461.

「この有名な三號に於て、デムーランは『恐嚇』の罪業を列擧して政府に警告を投げつけ、反革命を喜ばせた。更にこれは十二

月二十日、逮捕者の自由を求めるその家族による運動を起こさせた……」とオーラルは述べてゐる。

(一八) 三號は十二月十五日付で發行された。

(一九) デムーランは直接原典に當つてゐる譯ではない。ボルテールの「ルイ十四世の時代」の引用句の中から借りてゐるのである。
(V. C. p. 68).

(二〇) Tacitus. *Annales*. 第一章七二節からつたとデムーラン自ら述べてゐる。(V. C. p. 72)

(二一) Aulard, *Histoire politique*, p. 461.

オーラルは「この移り氣と矛盾の多い議論で人に非難されてゐるデムーランを甚だ横柄に扱つたロベスピエールに對して、デムーランは自尊心を傷けられた。デムーランはロベスピエールに立ち向ひ、恐嚇の罪業の數々を『ヴェウ・コルドリエ』の三號に述べ立てた」と書いてゐるが、事實は全く反對で、彼は完全にはロベスピエールの支持を受けてゐた。(V. C. p. 11).

(二二) 「革命政府の原則」は十二月二十四日(共和曆ニヴオズ)國民公會に於てロベスピエール自身によつて發表され、こゝで彼の兩派に對する態度が明らかになつた。(V. C. p. 14). ブーシェ・ルーに記載されてゐるこのロベスピエールの演説によると溫和主義と過激主義を明瞭に自由の敵であると思ひ、この二つのルートによつて專制君主は吾々を奴隸狀態に陥れるのは不可能であると述べてゐる。(Bouchez et Roux, *Histoire parlementaire*, Tome 30. p. 458-469).

(二三) V. C. p. 108

(二四) コロー・デルボアは當時、リオンで反革命派の彈壓に棘腕を振つてゐたが、三號發行直後、公安委員會に復歸し、ロベスピエールを引張つて強硬政策に踏み切らせた。恐らく彼がパリに歸還してゐなければロベスピエールは更に溫和派に動かされてゐたのは明らかである。従つて溫和派としては、彼の復歸によつて、ファブール・デグランティヌの釋放の見透しを捨てなければならなかつた。

(二五) デムーランは本號の日付を十二月二十日としてゐるが、本號に材料として扱はれてゐるのは同日までの國民公會とジャコブンの論議からとられてゐるので、パリの保安委員會が公安委員會に告發した日付からみて二十四日頃と思はれる。(V. C. p. 113).

(二六) ジロンド派ブリソーの反革命的溫和主義を指してゐるのは言うまでもない。

(二七) こゝで引用されてゐるのはゴードンの演説集の佛譯 (Gordon, *Discours historiques, critiques et politiques sur Tacite*,

Gordon, Discours historiques et politiques sur Salluste) からで、直接、原典に當つてゐた譯ではない。この版の初版は一七二八年、佛譯のは一七五九年である。尚、アンリ・カルヴェは Desmoulins Plagiaire と題して兩者の記事を對照的に比べ、全くゴードンの焼直したと極めつけてゐる。(V. C. p. 95-107).

- (二六) この説明はカルヴェによる。(V. C. p. 15). オーラール以來の事態説によれば、デムーランの緩和政策は斯様に説明されるのであるが、グランに従えば、「公安と國防」の曲目を演奏してゐるブルジョア史家の典型的な説明の仕方とされてしまふのである。(D. Guérin, La lutte de classes sous la 1^{re} République, 1793-7. Tome. II, p. 376-9. Post-face). グランのこの考えでは、デムーランを單にブルジョアの手下とするのは困難である。何故ならば、ルフェーヴルを云つてゐるように、サン・キュロットがこの難局を引き受けても公安委員會の政策と大同小異の政策をとらざるを得ないであらうからである。(Annales Historique de la Révolution Française, No. 106, Avril-Juin 1947, p. 173-9).

- (二九) La Commission inspectante des Postes. 郵便檢閲委員會の監視下に置かうとするものであつた。

- (三〇) 五號の見出しには十二月二十五日とあるが、實際は一月五日であつた。(V. C. p. 129). 分量はカルヴェ本の百二十九頁より一七一頁まで及んでゐるが、内容はデムーランの一身上の辨明につきてゐる。

- (三一) 五號の發行の狙ひは實はエベールがブーショット將軍の軍事費から新聞刊行費として一二萬リーヴルを受けとつたのを暴露することであつたが、後述するように、この六月二日付けの國庫支拂の記録のコピーは間違ひである。ブーショットと「ペール・デュシェーヌ」の反證によれば、六月二日付とあるのは六月十二日であり、その日にブーショットは臨時行政委員會から軍隊新聞購讀用として五萬リーヴルを正式に受けとり六月より十月に至るまで合計約六萬リーヴルを「ペール・デュシェーヌ」に渡したのである。従つて十月のみで、「デュシェーヌ」六十萬部の發行費用として二萬六千八百十六リーヴルかゝり、差引四萬三千百八十四リーヴル残つてゐると云ふのも間違ひである。(Bouchez et Roux. Histoire parlementaire. Tome 31. p. 232-3). 軍隊の革命化を推進するため、新聞、パンフレットを用ひたのはカルノー以來のことで「ペール・デュシェーヌ」紙のみに補助金を與えたことは有り得ない。エルローの記す所によれば購讀豫約金を拂つてゐるのは十數紙に上つてゐる。(G. Herlaut, Le Colonel Bouchotte. Tome II. p. 97-99)

- (三二) ジャコバン・クラブで「ヴェウ・コルドリエ」の檢討を行つてゐたロベスピエールは、もはや五號の内容檢討をする必要はない。

い。デムーランの溫和主義がアリストクラシーの復活を助けるのは明らかであると云つてゐる。(Bouchez et Roux, Histoire parlementaire tome 31. p.196)

(三) (V. C. p. 172-7.

(四) ロベスピエールはデムーランがジャコバンから追放されるかどうかは單なる個人的問題であつて、事は公共の利益が計られるかどうかによるとして彼の追放を余り重視してゐない感じを與えてゐる。(Bouchez et Roux, Ibid, Tome 31. p. 196-7)

(五) Bouchez et Roux, ibid., Tome 31. p.237-243. 尙、この會議でデムーランのジャコバンからの追放が決定された。(Bouchez et Roux, ibid., Tome 31, p. 242.)

(六) V. C. p. 20.

(七) V. C. p. 174.

(八) Bouchez et Roux, ibid., Tome 31. p. 196.

(九) 第六號の發行日付は一月二十五日頃と推定されるが、正確な日付は分らない。(V. C. p. 179)

(十) 第五號では意見の相異には觸れてゐない。カルヴェはデムーランが Panckoucke, Bibliothèque latine-française にあるキクロ全集第九卷の二〇五頁にあるものを引用したと述べてゐる。しかし、この六號では意見の不一致についての出所を明らかにしてゐない。

(十一) ジャコバンの統制經濟(特に公定價格令)を指すものと思はれる。これからみるとデムーランは自由主義經濟に與してゐたことになるが、彼がどの程度經濟問題に見識を持つてゐたかどうか極めて疑はしい。恐らく漠然と恐嚇の緩和化に關聯してかように云つてゐるのあらう。カルヴェ、ブーシェその他にその言葉の解説は見當らない。

(十二) (Bouchez et Roux, ibid., Tome 31. p. 250-1) の記述によるとデムーランの義父デュプレシイは反革命の陰謀の容疑をうけて逮捕された。ブーシェによるとその明瞭な證據はないが、デュプレシイの家宅搜索にきたセクシヨンの委員が彼のビブリオテークにあつた古い公用文書入れに百合の花(ルイ王朝の紋章)が刻まれてゐるのち見つけ、それを逮捕の口實にしたらしいと云つてゐる。

(十三) V. C. p.23. 六號はデムーランの存命中發行された最後のもので、七號以下は出版者を變えてテルミドル反動時代(八月二十

五日)に始めて出版され其の後十九世紀に入つて再版を見た。七號のデムーランの定稿は確かに出版者のデュセーヌに渡されたが、デュセーヌが三月三十二日に逮捕され、その上、その前からの壓迫が甚だしいためデュセーヌは一部の修正が認められれば出版してもいい考えを持つてゐた。(V. C. p. 197-200) 八月に出版されたのは元の原稿とは大分異つて居り、マトン、ヴレー等の協力にもかゝらず定本と云ふものはないようである。

(四四) V. C. p. 25.

(四五) V. C. p. 26.

(四六) V. C. p. 217.

(四七) A. Aulard, *ibid.*, p. 461.

(四八) V. C. p. 28. ゴードン等の翻譯家の引用が至る所に見られ、彼獨自のものは殆んどない。剽窃家デムーランと云ふ言葉が出る所以である。カルヴェはバブーフによるとデムーランはエスプリに於ては左派でアーム(心情)では右派であつたと傳えてゐる。(Babeuf, *Du système de dépopulation*, p. 60). なお Maurice Dommanget 編の *Pages Choies de Babeuf* の一八一頁より五頁にその一部が採録されてゐる。

(四九) 略歴でも書いてゐたようにデムーランは九三年十一月位まで全く政治の表舞臺に出てゐないし、事態の動きには無關心であつた。賭博場の常連^{アレチエ}としての生活からもそれは充分に窺はれる所であらう。

(五〇) V. C. p. 30. この曖昧さが「ヴェウ・コルドリエ」の失敗の原因にもなり反對に又成功の原因にもなつたのではないかと云ふ疑問をカルヴェはつけ加えてゐる。

(五一) A. Aulard, *ibid.*, p. 460-5.

(五二) A. Aulard, *ibid.*, p. 461.

(五三) A. Mathiez, *ibid.*, p. 118. マティエの説明は本書の百十八頁より百三十三頁に於て要約されてゐる。彼はロベスピエールが革命の利益のみしか考へてゐなかつたとして彼に對する積極的な評價を打ち出して居り(A. Mathiez, *ibid.*, p. 130)。「ヴェウ・コルドリエ」は要するに *un cordelier vieille* に過ぎなかつたといふ。(A. Mathiez, *ibid.*, p. 123).

(五四) G. Lefebvre, *La Révolution Française (Peuples et Civilisations, Tome XIII)* Paris, 1951. p. 371-6

(丑) V. C. p. 193-4. 非難される根據は第六號に見られる他にはない。

(寅) ブーショット大佐の政治家としての又陸軍長官としての詳細な傳記的評價は (Herlaut, Colonel Bouchotte, Tome I et II, Paris. 1946) に於て得られる。本書には所謂脚註はないが、出典の根據は本文の中に殆んどあげられて居り、ブーショット研究の云わば決定版であると言つてよい。著者を一貫して流れてゐる主張は、ブーショットが軍隊に革命精神を植えつけその市民的國民的編成替に成功し政治的イデオロギーを離れ祖國フランスの防衛に貢献した眞のパトリオットであつたと云ふにある。著者は又彼が如何なる偏つた政治クラブにも入らず、祖國の防衛と云ふ限りに於いて公安委員會に忠實であつたと云ふ。著者エルローは文博、ロベスピエール研究學會の理事の一人。

(卯) ダニエル・グランはウルトラ即ち過激派がプロレタリアート層の利益の奉仕者だとしてゐる。ダニエル・グランの評價(史學史的位置の確定)は或る意味では非常に難しい。グランはその著書の第二卷後書でジャン・ジョレエス、マティエ、ルフェーヴル、ラブルース等の正統派を全て隠すべき何ものかを持つてゐるブルジョア史家、官學御用學派としてゐるが、彼の立場は理解出来るにせよ、その批判は困難とも云えよう。世界觀的立場の相異と云つてしまえばそれだけのことであるが、一應ルフェーヴル流に綿密な實證的批判による他方法はないようだ。

(辰) Bouchet et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 232-3. 及び註三一参照。

(巳) 註五六参照。

(午) Bouchet et Roux, *ibid.*, p. Tome 30. p. 137.

(未) Bouchet et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 137.

(申) Bouchet et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 137-8.

(三) エベール派は「理性の祭壇」を強力に促進すれば權力を掌握出来ると考えて居り九三年憲法の批准と五月三十一日の後始末をつけた後、國民公會の解散を秘かに狙つてゐた。(Bouchet et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 140)

(四) Bouchet et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 145-8. ブーシェのこの部分の分析は明晰を極めてゐる。兩派の性格をこれほどはつきり指摘してゐるものは他にない。

(五) A. Soboul, *Les Sans-culottes Parisiens en l'An II*, p. 39.

- (六六) 恐嚇の緩和、革命軍の設置、司會官の選任等に於てサン・キュロットとモデルは常に對立してゐた。セクションが一つの同質的な利益共同體とは云えない所以である。(A. Soboul, *ibid.*, p. 36-51.)
- (六七) 十二月四日會による(Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 458-469) 自治的機能を縮少し行政部門に於る國家權力の直接的支配權を強化するのその重要な狙いの一つであつたことが分る。尚、ソブールも十二月四日令がセクションの機能を弱體化する傾向があるのは明白であるとしてゐる。(A. Soboul, *ibid.*, p. 359.)
- (六八) ブーシェの説明を見ても、ブーショットの名はエベール派の形成過程には入つてきてゐない。(Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 137-140)
- (六九) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 100-101.
- (七〇) Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 31. p. 234-7.
- (七一) Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 31. p. 236.
- (七二) ダニエル・ゲランの指摘するようにカルノーは屢々ブーショットを批判してゐた。(D. Guérin, *ibid.*, Tome II. p. 27-9. 尚、カルノーは軍政部門の仕事もブーショットと共同して行ふように命令されたため不満を持つてゐた。(拙稿ラザール・カルノー斷考「史學三十二」一、二」参照。
- (七三) Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 30. p. 352-5.
- (七四) Herlaut, Tome II. p. 119-24.
- (七五) Aulard, *Recueil du Actes du comité de Salut Public*. Tome III. p. 534. 史學拙稿(三十ノ三)参照
- (七六) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 127.
- (七七) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 130.
- (七八) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 141-3.
- (七九) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 145.
- (八〇) Herlaut, . Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 164.
- (八一) Herlaut, *ibid.*, Tome II. p. 181-2.

- (二) Herlaut, *ibid.*, Tome II, p. 192. 何れにせよ、ブーショットがエベール派でないことは確かである。
 - (三) 拙稿「ラザール・カルノー斷考」(史學三十二ノ一、二)参照。カルノーが軍需補給で無能であつたと云ふのではない。カルノーは公安委員會の陸軍擔當者としてより廣い見地から活動を求められたと解釋すべきである。
 - (四) 制度としての統制主義が見捨てられるのは九四年四月に入ってからであるが、食糧補給の面から外國買付がとり上げられてからは(九三年十月)事實上、自由主義經濟への動きが始まつてゐた。拙稿、史學掲載論文参照。(史學三〇ノ三)。
 - (五) 補給問題の本格的な解決の必要を最初に叫んだのはブーショットであつた。(Heraut, *ibid.*, Tome II, p. 210).
 - (六) たとえば、ライン軍團の場合はニパーセントの利益が保證されてゐた。(R. Werner, *L'approvisionnement en pain et la population du Bas-Rhin de l'Armée de Rhin pendant la Révolution*, p. 367).
 - (七) Werner, *ibid.*, p. 368.
 - (八) Bouchez et Roux, *ibid.*, Tome 30, p. 388.
 - (九) Guérin, *ibid.*, p. 24.
 - (十) 制度としては、Commission des Substances があり、補給擔當地域に對する命令權を握つてゐたが、事實上の權限は、補給監理權を持つてゐる軍團付委員にあつた。(拙稿 *Commission des Substances の食糧補給政策をめぐる諸問題*)(史學三〇ノ三)参照。
- 尙、革命政府の特色は立法府である國民公會がその常任委員會を通じて行政權を行使した點にある。臨時行政委員會はその最初のものとも云ふべきもので、九四年一月には形式的に新しい十二の行政委員會に代つたが、實質的には變つて居らず、形式には國民公會と公安委員會の出先機關としての地方派委員の支配權をもち、軍隊付委員もその管轄下に置かれた。公安委員會は十二の行政委員會と同列に置かれるべきものであるが、實際には獨立した大幅な執行機關として保安委員會と共に獨裁的な行政權を行使した。ジャコパン黨は人民結社で正式の機關ではないが、革命政治の最下部の組織として實質的に革命の遂行に大きな役割を演じた。(前川氏、フランス革命における獨裁機構、猪木正道編、「獨裁の研究」所收、昭和三十三年四月、創文社)。
- (十一) Aulard, *op.cit.*, Tome, XVIII, p. 384. 同様の報告は同く Aulard, *op.cit.*, Tome, VI, p. 110-11. に於て東ペンネー軍の場合にも見られる。尙拙稿「L'An II に於ける Approvisionnement の問題」(史學二九ノ三、七一―三頁)参照。

(211) Herlaut, op. cit., Tome I, p. 55 エルロオのこの記事は、陸軍委員會と軍團付委員とに於いて利得のあつた事實のみを指摘し、ブーショット攻撃の眞意には觸れてゐない。

(補註) このブーショットの傳記的紹介はエルロオの「ブーショット大佐」第一卷一—五二頁に據つた。

あとがきと補註

革命時代の代表的なデマゴーグとしてカミュー・デムーランの名はサン・ジュストやラザール・カルノーの名よりも人によく知られてゐるが、案外彼の實情は分つてゐない。またたとえ分つてゐたことがあつても誤つて傳えられてゐることが多過ぎるようだ。パレ・ロワイヤルのカフェでネッケル罷免の最初のニュースを知らせ、そのカフェのテーブルの上に立上つて「この罷免はパトリオットの聖バルテルミーの合圖の鐘だ。今夕、シャン・ド・マルスからスイス人とドイツ人の兵隊が吾々を殺しにやつてくる。吾々に残された手段は一つしかない。それは武器をとることだ」と叫んだことは有名であるが、これなども實は多分に怪しいようだ。「ヴェウ・コルドリエ」の第五號にはこの時デムーランが吐いた言葉とその前後の事情が詳しく書かれてゐるが、實際に彼が叫んだ言葉と後に彼が書いたものとの間にも相當の開きがあり、又事實にも大分違ひがあるようである。革命史年報第七卷に於るルネ・ファルジュ René Farge の記述によると「ヴェウ・コルドリエ」に載せられたデムーランのこの部分は一七九〇年に出されたブリュウールとベルトオの「革命の史的提要」にデムーランが書いたものを元にして居り、事實そのものが既に違つてゐると云ふ。たとえば市民にヴェルサイユから到着したと云つてゐるが、その父に出した手紙によればその事實はないようだし、帽子の徽章の色をアメリカ獨立當時のシンシナトスの縁にするか青にするかと市民に問うたことも實際にはないことだしデムーラ

ンはたまたまプリユールの「革命提要」にある版畫に書かれたのを見てそう書いたに過ぎないと云ふ。従つて「ヴェユ・コルドリエ」に書かれたのと八十九年當時に彼が行動した事實とは大分違つてゐる譯である。一番問題になるのはネッケル罷免のニュースであるが、これも始めてパリの市民に知らせたのはデムーランではなく、七月十二日付の他の一パリ人の手紙でも實證されるようだ。その罷免のニュースがパリに着いたのは二時ではなく丁度晝頃で、彼が演説したのは、彼の書いた「自由フランス」では四時「革命の史的提要」と「ヴェユ・コルドリエ」では二時半になつてゐるが、オペラ座の支配人の手紙によると群衆に閉場させられたのが四時から五時頃のことと、デムーラン自身が「ブリソ一派の歴史」で自分の演説後三十分たつてから大運動が起つたと書いてゐるのとつき合はせると結局三時半過ぎ頃が正しいらしい。勿論、彼は自ら生のニュースを持つてきた譯ではないし演説した時間も大分づれがある。

デムーランのアジ演説で民衆が街頭デモに出たことは事實であるが、その行進に彼は加つてゐないし、十四日に彼がバスチーユに着いた時には既に陥落した後だつたと云ふ。これによつてみても、デムーランとバスチーユ陥落に直接因果關係を想定するのは困難になる譯だ。

一、二の例を擧げててもこんなぐらゐなのであるからもつて他のことも大體見當がついてしまふ。「ヴェユ・コルドリエ」を批判的によむと云つても先づ事實そのものゝ確定から始めなければならぬし、字句の比喩的な使はれ方は勿論のことその出所、據り所となると全く見當のつかなくなる場合が屢々ある。所が、人の作品を盗用した場合には不思議に發見されてゐる場合が多い。三號のゴードンの記事を借りて共和制と王制の比較してゐる場合などはその良い例であろう。革命時代の軍隊に對する思想教育には新聞が随分利用されてゐたが、軍隊からの購讀申し込み數は三千から多い時でも一萬を僅かに越す程度で、一紙に六十萬部の申し込みがあつたとは信じられない。デムーランの誇張してものを

云ふ傾向の一端でもあろうか。

ところが彼が一番憤慨した妻の収入四千リーヴルと云ふ數字は間違つてゐないようだ。この収入は妻の婚資十萬リーヴルの利子でこれだけは正確らしい。デムーランの研究にはこのような事實の確定が先決問題であることがよく分るような氣がするのは筆者一人ではないであらう。デムーランが民衆政治家で、新鮮な革命的イデオロギーの持主ではないかと云ふ先入觀念も全く誤つてゐたし、革命勃發と共に入り込んできて一旗あげたい多くの連中とその生活は大して變つてゐないようだ。この點では、「祖國フランス」を一枚看板にして律氣一方に革命に奉仕してゐたブーショットとは全くいゝ對照をなしてゐる。この無欲な無類な忠節家もデムーランを追うようにして逮捕されてしまふのであるから「恐嚇」が七月にあえなく倒れたのも、思えば不思議ではない。アルベール・マティエの云ふ輝く九三年の眞紅の太陽とは一體何を指してゐるのだらう。